

西常盤貝塚Ⅱ

—市道正尾東線・綿打橋釜郷線道路改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告—

2011

諫早市教育委員会

発刊のことば

諫早市は長崎県南部の中央域に位置し、北方は多良山塊で佐賀県に接し、三方は有明海、橘湾、大村湾で海に囲まれています。

このような地勢により古くから交通の要衝として長崎半島と島原半島を接続し、大宰府や中央行政機関との中間点として機能してきました。また、三海を利用した海上交通も発達しており、これらの交通機関の手立てにより他地域の文物がもたらされています。

今回報告します西常盤遺跡では、縄文時代を通じて鹿児島・宮崎県域からの土器類の流入が認められ、また対岸の熊本県の黒橋貝塚において認められる骨角器と同様の道具が確認されるなど、活発な交流の跡を残しています。

このことは、人を介して交流を行った結果であり、いろいろな知識や知恵、共通する考え方など広範な交流が遥か昔に行われていたことを裏付けています。

前回平成9年の調査時には、貝塚から発見される遺物の中に、銚や刺突具などの狩猟具や動物遺存体の検出が少なく、生産域の様相を見せているのであろうと想定しましたが、今回もそれらの資料は少なく、同様の想定域内にあるものと考えております。

このように、遺跡から出土する遺物に基づく研究が考古学の基本であり、調査資料の全面的開示が必須のこととっております。

前回の調査資料を含め、今回の調査資料が遺跡から確認された客観的資料として、皆様の研究の一助となれば幸甚に思いますとともに、本書が諫早研究の端緒ともなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に際しましてご協力・ご尽力いただきました皆様に深甚の感謝を申し上げ、発刊のことばといたします。

平成23年3月31日

諫早市教育委員会

教育長 平野 博

例 言

1. 本書は市道正尾東線・綿打橋釜郷線道路改修工事に伴う西常盤遺跡の発掘調査報告書である。
2. 道路改修事業に先立ち行った範囲確認調査は、諫早市土木部道路建設課の依頼を受けて、諫早市教育委員会が実施した。調査期間は平成21年5月13日から同20日に実施した。
3. 本調査は諫早市土木部道路建設課の依頼を受けて、諫早市教育委員会の指導・協議のもと現地での発掘調査を株式会社扇精光が実施した。調査期間は平成21年8月27日から同年11月13日までである。
4. 整理作業及び報告書作成は平成22年度に諫早市郷土館で行った。
5. 範囲確認調査において採用して方位は磁北を、高度は標高である。
6. 本調査で採用した方位は座標北を、高度は標高である。
7. 範囲確認調査及び本調査で作製した図面類や写真類、遺物や自然遺物は諫早市教育委員会が諫早市郷土館で保管している。
8. 範囲確認調査の調査体制は次のとおりである。

〔総括〕

諫早市教育長	平野 博	教育次長	平古場 豊
文化課長	松本 玉記	参事兼課長補佐	船岡 秀海

〔調査〕

文化課参事	秀島 貞康	事務職員	野澤 哲朗
調査員	深川 由香	調査指導	古賀 力
調査指導	橋本 幸男		

9. 本調査及び整理作業の体制は次のとおりである。

諫早市教育長	平野 博	教育次長	山口 哲雄
文化課長	松本 玉記	参事兼課長補佐	船岡 秀海
参事	秀島 貞康		
事務職員	野澤 哲朗	文化財調査員	田苗 隆史

10. 本書の執筆は

IV-2-1 を橋本幸男

IV-2-6 を田苗隆史

他を秀島が行った。

9. 本書の編集は野澤、秀島が行った。

本文目次

発刊のことば

例言

I	遺跡の地理的・歴史的環境と周辺の遺跡	1
1.	遺跡の地理的環境	1
2.	遺跡の歴史的環境	3
II	遺跡の発見と調査の履歴及び調査に至る経緯	3
1.	遺跡発見の契機	3
2.	調査の履歴	4
3.	調査に至る経緯	4
III	調査の概要と記録	5
1.	範囲確認調査と調査方法	5
2.	本調査と調査方法	5
3.	土層概要と土壌サンプル	8
- 1.	土層概要	8
- 2.	土壌サンプル	9
IV	検出された遺構と遺物	11
1.	検出された遺構	11
2.	検出された遺物	11
- 1.	土器類	11
- 2.	石器	17
- 3.	骨角牙貝製品	21
- 4.	動物遺存体	22
- 5.	植物遺存体	24
- 6.	ブロック・サンプル分析	24
V	総括	26

挿図目次

第1図	諫早市位置図	1
第2図	周辺遺跡分布図	2
第3図	貝層、地山堆積想定図（平面S-1/400、立面S-1/20）	5
第4図	グリッド配置図（S-1/400）	6
第5図	範囲確認調査及び本調査調査区設定図及び断面模式図（平面S-1/1000、立面S-1/200）	7
第6図	本調査東壁土層図（S-1/40）	10
第7図	土器実測図1（1~17、S-1/3）	15
第8図	土器実測図2（18~39、S-1/3）	16
第9図	土器実測図3（40~52、S-1/3）	17
第10図	石器実測図1（1~11、S-2/3）	19
第11図	石器実測図2（12~30、S-1/4、29・30は1/8）	20
第12図	骨角貝製品実測図（1~5、S-2/3）	21

表目次

第1表	出土遺物一覧表	11
第2表	土器観察一覧表	14
第3表	石器器種別・層位別一覧表	18
第4表	石器属性一覧表	18
第5表	骨角牙貝製品一覧表	21
第6表	ニホンシカ、イノシシ歯式	22
第7表	動物遺存体一覧表	23
第8表	植物遺存体一覧表	24
第9表	貝類分析表	25
第10表	3層採取貝類一覧表	25

図版目次

図版1-1	遺跡遠景	-2	範囲確認調査	1 T西壁土層断面及び1層中土師質土器(56)出土状況
図版2-1	G7東壁土層断面及び3層中礎石(29)出土状況	-2	F9	3層ニホンシカ(1)出土状況
図版3	土器1（1~27、S-1/3、番号は挿図番号に一致）			
図版4	土器2（28~52、S-1/3）			
図版5-1	土器3（53~58、S-1/3）、青磁・白磁	-2	石器	（29~30、S-1/3）
図版6	石器（1~28、S-1/3）			
図版7	動物遺存体（ニホンシカ、1~24、S-1/3）			
図版8	動物遺存体（イノシシ、25~36、S-1/3）			
図版9	動物遺存体（37~66、S-1/3）、骨角牙貝製品（1~5、S-1/3）			
図版10	遺物詳細写真（番号は挿図番号に一致）			

I 遺跡の地理的・歴史的環境と周辺の遺跡

1. 遺跡の地理的環境

西常盤遺跡は、佐賀県との県境をなす霊峰多良山塊から延びる丘陵が、諫早湾に海没する海拔1 m前後の丘陵端部に立地する。遺跡は東経130° 5′ 30″、北緯32° 52′、諫早市正久寺町95-1番地外の田圃に所在する。

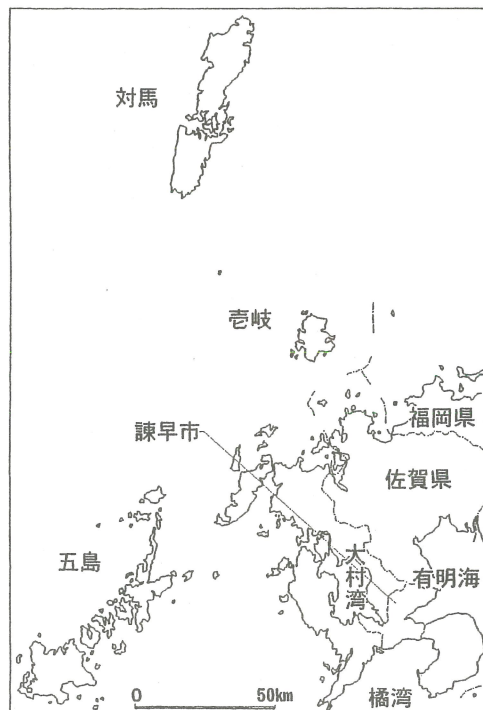
多良岳火山は東西24km、南北34km、面積590km²ほどを測る大きな火山体といわれ、主峰は経ヶ岳で1,075mを測り、周囲に標高1,000m前後の多良岳、五家原岳、帆柱岳などが寄生している。基盤は古第三紀層と玄武岩や変朽安山岩である。多良火山の本体は安山岩質の火山岩類で豊肥火山活動の噴出物である。その後山陰系火山活動により角閃石安山岩を主体とする溶岩円頂丘の多良岳や五ヶ原岳などの山頂部が形成された。五家原岳山頂の角閃石安山岩は25万年前とされているという。

多良岳火山の火山岩類の層序は下記のとおりである。

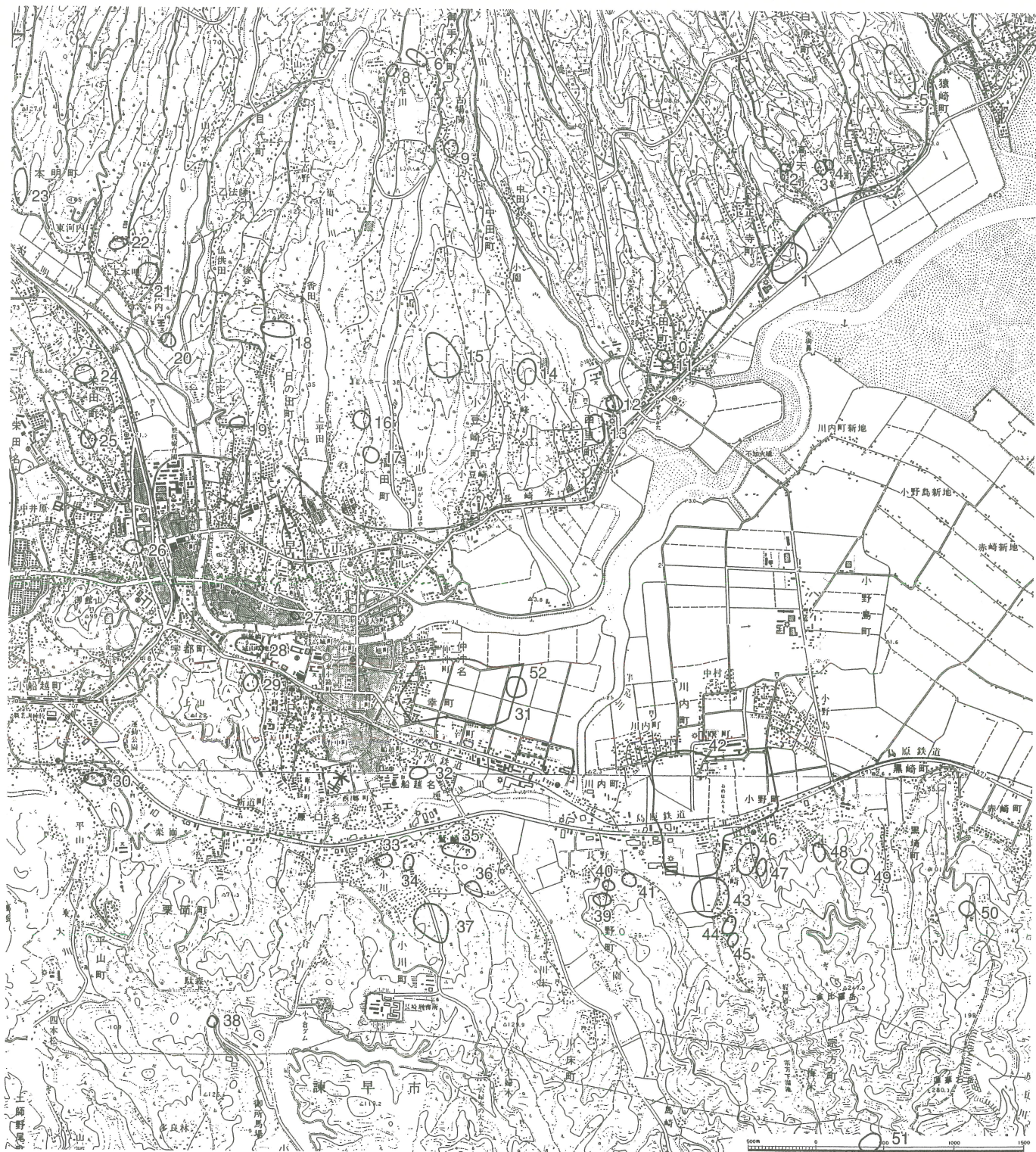
多良岳火山岩類	Ⅲ 多良岳溶岩類	B	複輝石角閃石安山岩～せん雲安山岩
		A	せん雲複輝石安山岩
	Ⅱ 筑紫火山岩類	B	複輝石安山岩・集塊岩
		A	複輝石安山岩質火山砕屑岩
基盤玄武岩類	Ⅰ 玄武岩類	C	普通輝石かんらん石玄武岩（しそ輝石質岩系）
		B	かんらん石粗面玄武岩
		A	普通輝石・かんらん石玄武岩（ソレアイト質玄武岩類）
第三紀安山岩類			
古第三系			

（長崎県地学会編『長崎県の地学一日曜巡検ガイドブックー』1971より）

これら山頂部から派生した尾根は順次高度を逡減し、標高350m前後で傾斜角を変え、緩斜面を作るように標高を逡減させていく。つまり、1,057mの五ヶ原岳頂上から標高350m地点までの傾斜角は約7度前後であるが、この地点から丘陵末端までは約4度の勾配である。そしてこの標高350m前後に轟の滝、富川溪谷などの湧水が認められ、また湧水を堰き止めた古い溜池である野岳湖、川頭の溜池など数多くの溜池が周縁に認められる。ゆえに前後の高度には遺跡も立地し、川頭遺跡、善納岩陰、風突谷・山留坂遺跡など縄文前期・中期の遺跡がある。また、白木峰では古墳時代の遺物も看取される。



第1図 諫早市位置図



- | | | | |
|----------------|----------------|-------------------|-------------------|
| 1 西常盤遺跡 (縄文) | 14 正津遺跡 | 27 金谷遺跡 (中・近) | 40 長野大久保遺跡 (縄文) |
| 2 上薬師下遺跡 (中・近) | 15 中山遺跡 | 28 高城跡 (中世) | 41 下組遺跡 (縄文) |
| 3 高天遺跡 (縄文) | 16 窪ノ谷遺跡 (弥生) | 29 諫早家墓所 (近世) | 42 小野条里遺跡 (奈良) |
| 4 尾首鬼塚古墳 (古墳) | 17 中山遺跡 (中・近) | 30 平山A遺跡 (縄文) | 43 宗方筒井遺跡 (奈良) |
| 5 猿崎遺跡 (縄文・弥生) | 18 上横址遺跡 | 31 田井原条里遺跡 (中世) | 44 水の手遺跡 (古墳) |
| 6 菅牟田池遺跡 (縄文) | 19 折山頭遺跡 | 32 諫早農業高校遺跡 (弥・古) | 45 太郎丸遺跡 (弥生) |
| 7 垣内遺跡 (古墳) | 20 本明石棺群 (古墳) | 33 小栗A地点遺跡 (弥生) | 46 宮崎館遺跡 (先~古・中世) |
| 8 新立遺跡 | 21 本明石棺群 | 34 小栗B地点遺跡 (弥生) | 47 小野城跡 (中世) |
| 9 古場関遺跡 | 22 本明B遺跡 (古墳) | 35 十仙平遺跡 (縄文) | 48 小野貝塚 (弥生) |
| 10 東長田貝塚 (弥生) | 23 平松城跡 (中世) | 36 源内谷遺跡 (縄文) | 49 内野遺跡 (弥生) |
| 11 東長田遺跡 (中・近) | 24 八天下遺跡 (先~弥) | 37 小栗C地点遺跡 (弥生) | 50 仁田野A遺跡 (縄文) |
| 12 西長田遺跡 | 25 上打越遺跡 (先土器) | 38 駄森積石塚 | 51 宗方城跡 (中世) |
| 13 西里遺跡 (縄・弥) | 26 永昌遺跡 (縄文) | 39 崎田遺跡 (弥生) | 52 沖城跡 (中~近世) |

第2図 周辺遺跡分布図

2. 遺跡の歴史的環境

さて、遺跡直北にはJR長崎本線と並走するように諫早街道が貫通している。諫早の永昌宿を出立して1里半（約6km）で遺跡に着く距離である。さらに進んで3里半（約14km）で湯江宿に着く。そこから半里ほどで諫早街道からさらに竹崎街道が分岐する。竹崎街道は竹崎津まで進み、舟便にて佐賀と通じていた。さて諫早街道は湯江宿を過ぎて山麓域を通過する。すなわち今の高来・小長井両町の町界に沿って遡上し、山茶花付近を経て佐賀県の鹿島市に通じていた。旧藩時代の主要な街道として機能していたのである。また沿線には南北朝～戦国時代の山城や砦跡（諫早市―西里・尾首、高来町―小江・古田・天神ノ尾・武田・丸葉山、小長井町―田原・権現岳など）が2km前後の位置で確認されており、かなり古い時代から主要な街道であったことを窺わせる。

さて、貝塚から目を南に転ずると諫早平野が眺望される。自然の干陸作用を利用した耕地が開けたのは遙か古代に遡り、さらに後代条里制の痕跡が認められる小野地域の一大可耕地である。しかし、小野地域と対峙する当該地には広い可耕地が存在せず、僅かに地先に田圃を見るにすぎない。これはもとより本明川の流路に当たるため諫早湾の環流が沈積させる有明粘土の堆積作用が阻害されたことと、多良山系の尾根・谷地形を形作った水流による物理的浸食作用によるものであり、また各河川の流域も短く、かつ流底の勾配も急峻であるため扇状地形も形成することはなかったのである。

周辺の遺跡として、高天町の尾首古墳がある。南西に開口する単室横穴式石室と見られるが破壊を受けており詳細は不明である。この古墳に連動すると思われるものに小長井町の長戸鬼塚古墳、大峰古墳、高来町の善神さん古墳などがある。ともに丘陵末端部に立地し、複室構造の横穴式石室、線刻の装飾を持つ古墳として有明海を媒介とする系列を共にする氏族の奥津城であろう。かつては丘陵端部に古墳の存在があったとも仄聞するが昭和初期の鉄道敷設などの折、消滅したものと思われる。

II 遺跡の発見と調査の履歴及び調査に至る経緯

1. 遺跡発見の契機

西常盤貝塚は、平成5年県文化課（現学芸文化課）実施の市内田井原・沖城跡調査のおり、正久寺町在住の大嶽藤雄氏より田圃に貝が散布している旨の連絡があり、後日現地の踏査を実施した結果、青灰色の粘土と貝が縄文時代中期・阿高式系の土器とともに確認され、遺跡の存在が明らかとなった。

しかし、遺跡は貝塚を構成するものなのか、若干不明な点も存し、かつ標高的にかなり低位でありその存在に疑念無しとはしなかったが、小野宗方遺跡の例もあり、このような低位の遺跡は海進・海退に係る産物であろうと想定し、遺跡として認識するに至った。

これにより、その後、遺跡の発見届けを文化庁に提出するとともに「西常盤遺跡」としてゾー

ニングし、遺跡の登載をおこない周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されるに至った。

2. 調査の履歴

平成8年12月、株式会社白雪食品が長崎市から本市に進出・立地、工場建設がなされることとなり、試掘調査及び記録保存のための本調査を実施した経緯がある。この折の調査では、汽水域に生息するマガキを主体とした貝層が形成され、かつ骨角牙器の検出が僅少であり、双角状礫器などの主体的な道具の検出が偏っていることなどから、生産域を表象する遺跡であろうと推察された。土器は前期曾畑式土器から中期並木式、阿高式、後期鐘ヶ崎式土器など数量的には少ないものの連綿として検出され、晩期までに至っている（諫早市埋蔵文化財調査協議会調査報告書 第3集『西常盤貝塚』2000年）。

平成14年度には長崎県諫早土木事務所において、国道207号線とのインターチェンジ接続工事として県道多良岳線の改良工事が計画され、これに伴って長崎県学芸文化課による範囲確認調査が実施された。この時の調査では、平成8年度調査地点より南に位置し、すなわちより低標高の海側に位置した地点であったため、貝層等の遺構、あるいは遺物は確認されなかった。水田面の標高0.8～0.9m程であった。

また、昨年度・平成21年度事業として、国道207号敷設替え工事に伴う市道正尾東線・綿打橋釜郷線道路改良工事に係る試掘調査を実施した。その結果市道敷設予定地内にも貝塚の範囲拡大が確認されたため、記録保存のための本調査を実施することとした。このときの調査では、3層の暗青灰混土貝層からハイガイ、マガキ、ハマグリなどの貝類と、前期から晩期の土器・石器とともに、骨角牙器やシカ、イノシシ、魚類などの陸・海獣骨などが検出され、平成8年調査の状況と貝塚形成の相違を示している、と想定された。とくに貝類の捕獲対象がマガキからハイガイに変化していることは、前面に展開する諫早湾の海況の変化と呼応しているようである。

さらに、平成21年度重要遺跡範囲確認調査として周辺域の試掘調査を行って、遺跡の広がり の把握を行ってきたところである。

3. 調査にいたる経緯

国道207号付け替え工事はすでに終了しているが、正久寺町への引き込み線である市道正尾東線・綿打橋釜郷線道路改良工事の計画は古くより出されていた。この計画に基づき西常盤貝塚に対する予備調査依頼があったのは平成21年4月1日であった。

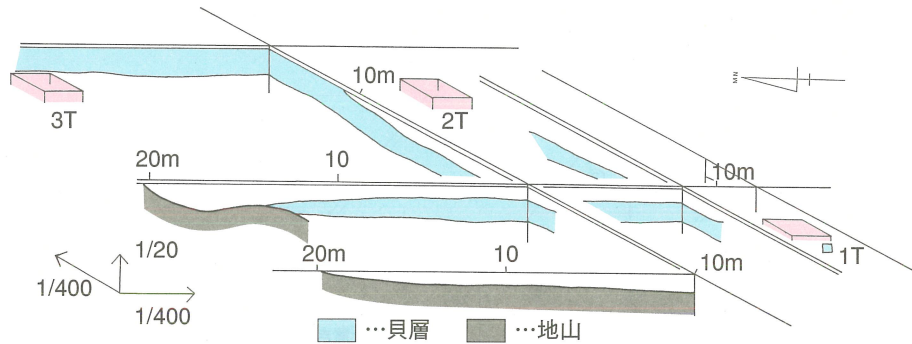
この依頼に基づいて諫早市教育委員会では西常盤貝塚の範囲確認調査の計画をたて、平成21年5月13日から同20日まで、遺跡の範囲確認を行うこととした。

さらにこの試掘調査の結果を基に協議を実施し、工事着手前の記録保存の調査を行うこととした。

Ⅲ 調査の概要と記録

1. 範囲確認調査と調査方法（第3～5図）

調査は道路改良事業予定地内にトレンチ（2×2 m）を6箇所任意に設定し、遺構あるいは包含層の時期や性格、範囲、包含層の厚さなどの諸属性を確認することを目的として実施した。トレンチの設定状況は平板測量（S-1/100）で行い、トレンチは上位から掘り下げて精査し、土層堆積の確認・図化、写真撮影などを行って記録した。また遺物の検出状況はドット・マップ（S-1/10）で記録し、併せて標高の記録も行った。また貝層や土層の堆積状況、地山の隆起状況などを正確に把握するため、調査範囲を含めた周辺のボーリング調査を4 m 正方形で100箇所程度行い、貝層の不連続部分などを把握した。この結果、貝層、礫層、地山の層順は第3図に示すとおりであった。



第3図 貝層、地山堆積想定図（平面S-1/400、立面S-1/20）

2. 本調査と調査方法

ー1. グリッド設定（第4図）

調査対象範囲全体を世界測地系に基づき4×4 mのグリッドに区切り、東西軸をA～K・南北軸を1～12に区分した。また、8×8 mを大グリッドとし、土層観察用のベルトを設定した。調査は8×8 mの大グリッド（ブロック）単位で行った。

ー2. 調査区

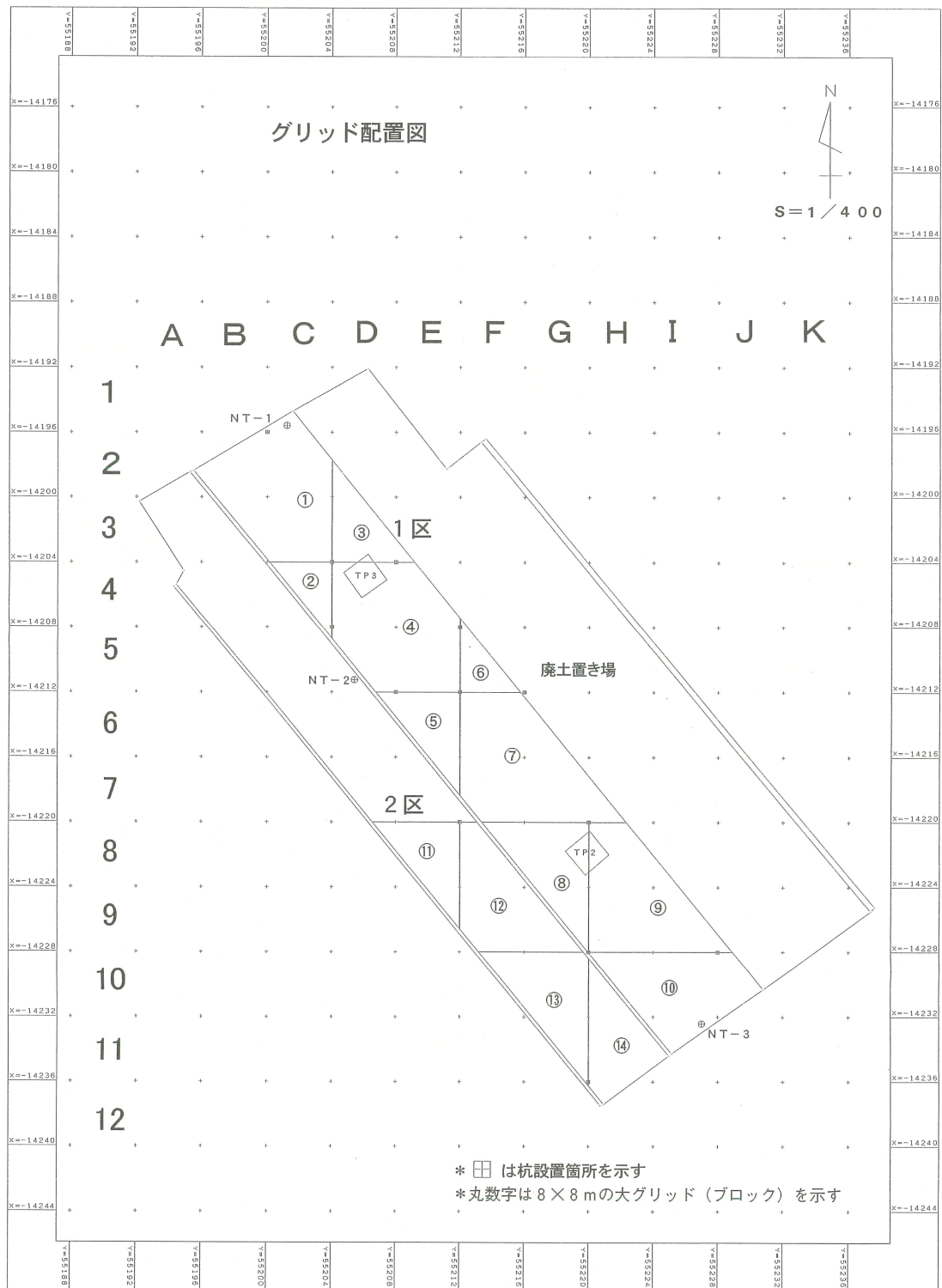
調査対象範囲（諫早市正久寺町84番1、85番1、87番1）を次のように区分した。84番1・85番1を1区、87番1を2区とした。

ー3. 遺物取り上げ（出土地点の記録）

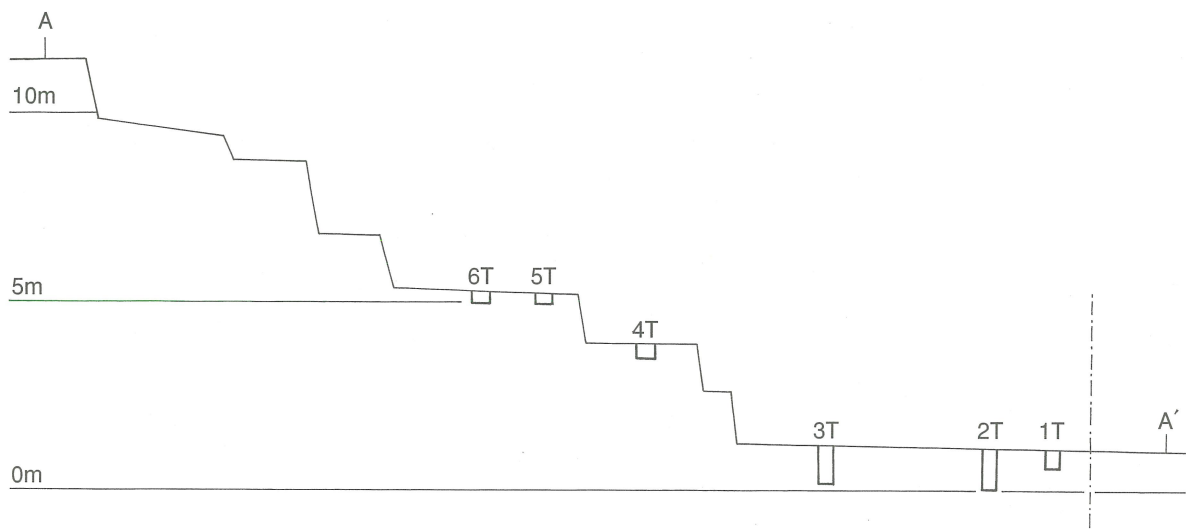
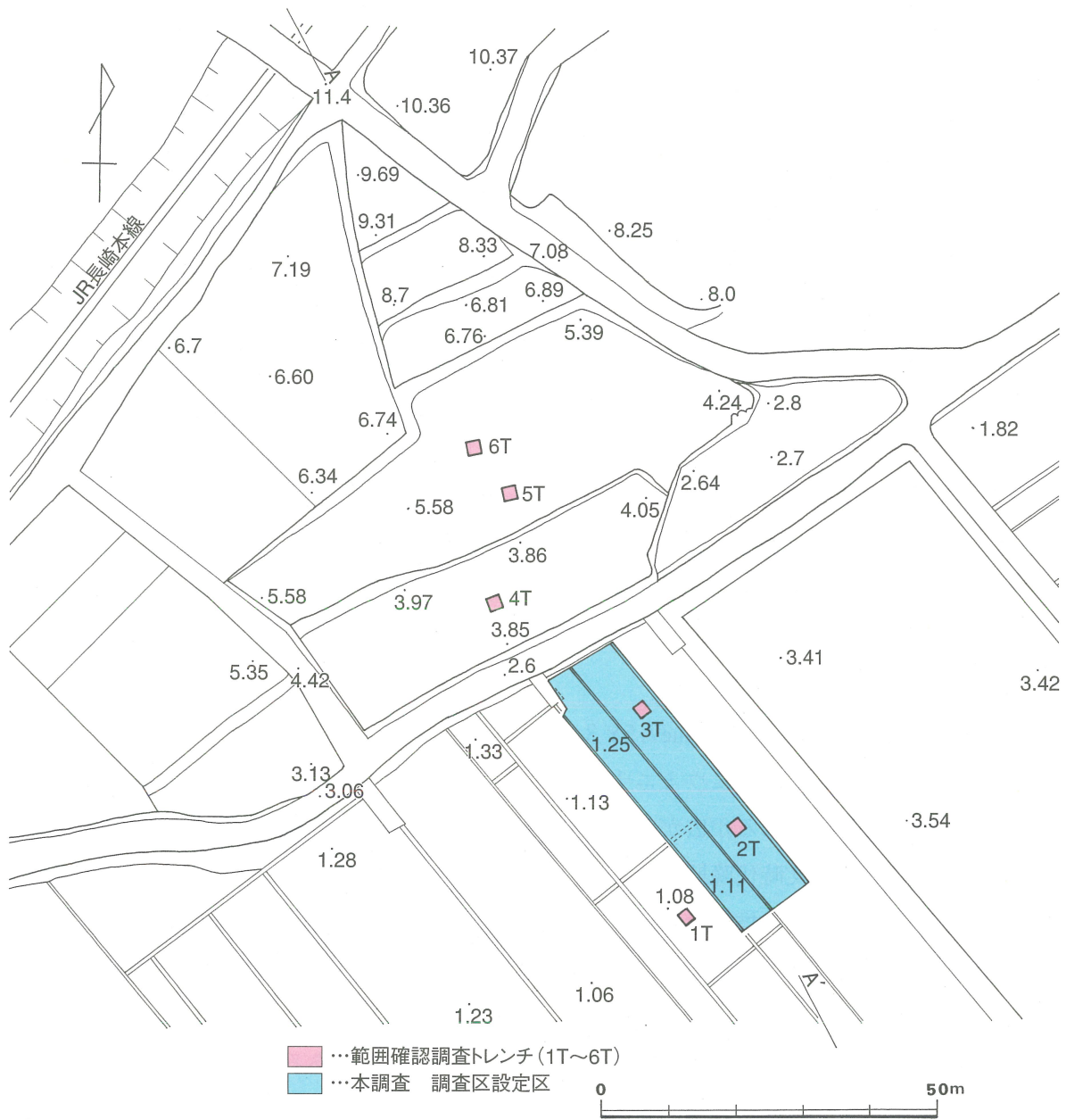
調査中に確認された遺物（土器・石器・骨角器など）はトータルステーション（SOKIA SET 3030）を用い出土地点の座標値および標高値を記録した。記録した遺物の総数は1031件1137点で、座標データは遺物台帳に記載し、ドットマップを作成した。

動物遺存体は、陸獣骨・海獣骨については座標値および標高値の記録を行い、貝類については任意に大グリッド（ブロック）ごとに取り上げた。

植物遺存体は、座標値および標高値の記録を行ったほか、任意に大グリッド（ブロック）で取り上げた。



第4図 グリッド配置図 (S-1/400)



第5図 範囲確認調査及び本調査調査区設定図及び断面模式図 (平面S-1/1000、立面S-1/200)

3. 土層概要と土壌サンプル

ー 1. 土層概要 (第5図)

- 0 層：暗青灰褐色土層 (Hue10Y 3 / 1) 調査区全域に堆積するやや軟質な土である。田を作った際の盛土と考えられる。
- 0b 層：青灰色混礫土層 (Hue10BG 5 / 1) 1ブロックおよび3ブロックの一部に堆積する。青灰褐色の砂質土に10~20cm大の礫を多量に含んでいる。本層の上位からは少量ながら礫の隙間から遺物が出土するが下位からは遺物が確認されない。本層は田を作る際に北側の丘陵から埋められた土である可能性が考えられる。
- 0c 層：明褐色粘質砂質土層 (Hue7.5YR 5 / 6) 0層の直下に掘り込まれた土であり、粘性を含む砂質土である。炭化物を若干含む。1区の東壁・8ブロックの北壁などで確認されている。田の水利のための土坑である可能性がある。
- 0d 層：暗青灰茶褐色砂質土層 (Hue 5 BG 5 / 1) 範囲確認調査時の3TのI層に相当する土層である。青灰色土と茶褐色土が混ざりあうような土であり、やや粘性も持つ土質である。主に4ブロックに堆積する。5cm程の小礫が若干混じる。鉄分が層中に万遍なく沈殿する。
- 1 層：暗灰茶褐色混砂貝層 (Hue7.5Y 3 / 2) 範囲確認調査時の2TのI層に相当する層である。暗灰茶褐色土にウミニナ、マガキなどの貝類を多量に含む貝層である。調査区全域から確認されるが広がりは一一定しておらず、ブロック的に堆積する貝層である。層中からは縄文時代晩期の土器などが確認される。プライマリーな堆積であるのか水成作用による二次堆積であるのかは不明であるが、仮にプライマリーな層であったとしても一定の範囲内で水成作用により移動している可能性は高い。
- 2 層：暗青灰色褐色粘質土層 (Hue 5 BG 4 / 1) 範囲確認調査時の2TのII層に相当する土層である。1層と3層の間に堆積する粘性が強い土層である。層内に粉碎された貝が若干混じる。遺物が確認される。
- 2b 層：暗青灰色粘質土層 (Hue 5 G 4 / 1) 9~14ブロックに堆積する土層である。非常に粘性が強い土質である。2層と異なり破碎貝の混入はほとんどない。有明粘土層とみられる。遺物はほとんど確認されない。
- 2c 層：淡青灰色砂質粘質土層 (Hue10BG 5 / 1) 2~5ブロックに堆積する土層である。粘性が強い土質であり、鉄分の沈着が確認される。遺物が出土している。
- 2d 層：暗褐色砂質粘質土層 (Hue7.5YR 5 / 1) 4~6ブロックに堆積する土層である。若干砂質を含む土質であり、10~20cm程の礫が混じる。層中には縄文時代前期~晩期の遺物が多く出土しているが、貝類は確認されない。2d層が堆積している範囲は直下に50cm~1m程の角がやや丸みを帯びている巨礫を含む層(4b層)が堆積している。礫は川原礫である可能性が考えられ、調査区の土層からは断定することはできなかったが、2d層が堆積している範囲は河川が流れていたことが想定される。2d層は河

川が埋まる過程で遺物などが廃棄された層である可能性がある。

- 2e層：淡茶褐色砂質粘質土層（Hue10Y 5/4）粘質土であるが若干砂質感がある土質であり、淡黒褐色の砂質土が斑に入り込む。1層の下位に堆積し、2層～4層を掘り込んでいる。堆積状況について、人為的ものであるか自然営力の影響によるものであるかははっきりしない。人為的な堆積状況であれば、田として使用されていた際の水貯め用の土坑か溝（クリーク）による可能性が考えられるが、平面的には不定形に確認されており、溝のように確認されなかった。また、水貯め用の土坑・溝（クリーク）であれば相当期間掘り込まれた状態を保っていたと考えられ、廃棄（埋め戻す）段階で1層（貝層）が水平堆積する状況は不自然である。そのため、確証には乏しいが波の水成作用による堆積である可能性を示唆しておきたい。
- 2f層：暗褐色粘質土層（Hue10Y 4/1）4ブロックの一部に確認される土層である。2c層と2d層が混じりあったと思われる土質である。波による水成作用により土層が攪拌されたのであろうか。
- 3層：暗青灰色混土貝層（Hue10BG 4/1）ハイガイ・マガキ・ハマグリなどの貝類を多量に含む貝層である。また、縄文時代前期～晩期の遺物（土器・石器）、骨角器のほか、ニホンシカ・イノシシ・魚類・イルカなどの陸・海獣骨、クロマツ・チャンチンモドキなどの植物遺存体が多量に出土している。貝類は二枚貝が閉じた状態で確認されるものがあるため、もともと干潟を形成していたと考えられる。そこに土器・石器・獣骨などを廃棄したと考えられる。
- 4層：暗青灰褐色粘質砂質土（Hue 5 G 3/1）範囲確認調査時の2TのIV層に相当する層である。7～14ブロックに堆積する土層である。上位に若干粉碎された貝を含むものの、基本的には貝を含まない粘性を持つ砂質土である。遺物は含まない。
- 4b層：淡茶褐色混礫粘質土層（Hue7.5YR 4/1）4～6ブロックに堆積する土層である。粘性が強く、50cm～1m程の角がやや丸みを帯びている巨礫を多く含む。河川により堆積した礫である可能性が考えられる。遺物は確認されない。

－ 2. 土壌サンプル

土壌及び貝類分析のためのブロック・サンプルを以下のように採取し、今回の報告に掲載した。また今回の分析に供しなかったサンプルは、後日の分析のため、保管することとした。

- ・サンプル①：8ブロック北壁（1層）
- ・サンプル②：8ブロック北壁（3層）
- ・サンプル③：5ブロック北壁（1層）
- ・サンプル④：5ブロック北壁（3層）
- ・サンプル⑤：11ブロック東壁（1層）
- ・サンプル⑥：11ブロック東壁（3層）
- ・サンプル⑦：11ブロック北壁（1層）
- ・サンプル⑧：11ブロック北壁（3層）

IV 検出された遺構と遺物

1. 検出された遺構

遺構としては0.5m付近と0.8m付近に1層と3層の2枚の混土貝層が確認された。

2. 検出された遺物

範囲確認調査及び本調査において確認された遺物は第1表に掲載した。

土器などの人工的な遺物、動物遺存体や植物遺存体などの自然遺物を含んでいる。

人工的な貝層である3層には173点の遺物が認められ、本層から遊離した遺物が0b~d層や2b~f層に含まれるものと思われる。これは田圃の水不足に対応するクリークの掘削などによるものと思われ、層相も粘質を示すものから砂質を示すものまでと様々である。

3層中にはキャリパー状の胴部形態を有する縄文時代中期の春日式系統の土器や阿高式系の土器を主体に、前代の轟系統の土器を含んでいる。また2d層中にも中期から後期段階の土器を含んでおり、前回の調査報告のとおり縄文時代中期を貝塚形成の始まりとすることができよう。

次節以下で出土した遺物の中から特徴的なものを掲載し、説明を加える。

種別	層位															計	合計
	0	1	2	3	4	0b	0c	0d	2b	2c	2d	2e	2f	3?	暗渠		
縄文土器	47	50	17	76	6	16	18	19	23	61	76	4	6	3	20	442	459
石器	25	1	6	35	7	20	4	9	8	23	42	6			5	191	238
弥生土器	2	2							1	3	1					9	9
土師器	23	6		1		5	1	2	2	13	10		1			64	67
土師質土器	45	5	5	2		3	3	4	10	11	2				3	93	93
須恵器	8					2	1		1	1						13	14
青磁	5					3	1		1							10	10
白磁	3															3	3
陶器	2	1				1	2								1	7	7
磁器	1								2							3	5
軽石	1							1								2	2
瓦質土器	5	1				1	2		1						1	11	11
貝類				2	1				1							4	4
自然石	14	11	2	18	1	6	7	3	3	9	15	2			1	92	99
植物遺存体		1	3	9	1		2									16	17
動物遺存体	2	14	2	28	4		2		2		1	1		3	2	61	62
現代物	2					1				1						4	4
欠番				2		1		1		1	1					6	6
計	185	92	35	173	20	59	43	39	55	123	148	13	7	6	33	1031	1110

種別	層位						計	合計
	1T	2T	3T	4T	5T	6T		
縄文土器			5	12			17	459
石器				47			47	238
弥生土器							0	9
土師器	1		2				3	67
土師質土器							0	93
須恵器				1			1	14
青磁							0	10
白磁							0	3
陶器							0	7
磁器				2			2	5
軽石							0	2
瓦質土器							0	11
貝類							0	4
自然石			1	6			7	99
植物遺存体			1				1	17
動物遺存体			1				1	62
現代物							0	4
欠番							0	6
計	1	8	70	0	0	0	79	1110

第1表 出土遺物一覧表（左表：本調査分、右表：範囲確認調査分）

－ 1. 土器類（第7～9図、第2表、図版3～5）

1～12は3層出土の縄文土器である。いずれも縄文中～後期に属すると思われる土器で、3層が比較的安定した層であると判断できる証左になると思われる。1は滑石を多量に含み、内外とも条痕による調整。口唇部と凸帯に刻みを入れ、さらに刺突による文様も施している。2

は深鉢形と思われる器形で、口唇頂部に2列の刻みを入れている。外面には凹線を施した後、2段の刻みを入れている。内外とも炭化物が付着し調整が見えにくい。3は口唇頂部に刻みを入れ、外面に2段の刻みを入れている。粘土紐の接着面で割れている。4はやや磨耗しており、調整不明。口唇頂部を少し凹ませている。5は全体が黒色を呈し、刻み等は無い。6は全体が磨耗しており、調整不明。口唇部の刻みは小さく間欠的である。7は山形の口縁になると思われるが、細片のためよくわからない。滑石を含まないタイプである。8～11は胴部の破片である。8は天地不明。低平な凸帯をつけ、貝殻腹縁によると思われる刻みを付けている。9はほぼ8と同様な破片であるが、磨耗がより進んでいる。10は現存部で径30cmに復元できる大型の器種であるが、薄い作りである。11は底部から剥がれたような破片である。焼成良く硬質。12は底部の破片である。内面に接着のための工具痕が観察される。

13～39は0層～2層出土の縄文土器であり、前期～晩期の土器が混在している。13は滑石粉末を多量に入れた深鉢形で、口唇頂部に刻みを入れている。14は口縁外面に波形の沈線を入れている。沈線の下方に刻みを入れていると思われるが、破片が小さいためはっきりしない。15は口唇頂部に刻みを入れ、外面に浅い凹線文を施す。16は口縁部を2段に肥厚させ、それぞれ上部の接合部分に瓜形の刻みを入れている。図中の斜線部分は接合面を示しており、各段が擬口縁状をなしながら、数段積み上げる手法を見せている。17は焼成良く硬質である。口縁外面に3条の沈線を入れる。18は口唇部に粘土を貼り付け、刻みや刺突で文様を付けている。外面にタタキ様の痕跡が残る。19～21はそれぞれに文様のある口縁の小破片である。19は磨耗著しいが、外面に貝殻腹縁を押し付けたような文様がある。20は口唇頂部に小さな刻みを入れている。外面には沈線で文様を描き、その中に2列の刺突文を施す文様構成である。21は極端に屈曲した口縁である。深い沈線による唐草文状の文様が付けられている。22は黒色磨研土器の胴部片で、胴部と口縁部の接合部分である。大きく外反する口縁部を有するもので、内外面ともに横方向に丁寧に研磨している。23は薄手の作りで、内外ともよく研磨されている。外面には、上から4本・2本・4本の沈線による文様が付けられているが、破片が小さいため全体の文様構成は不明。24は内外とも研磨された浅鉢形の土器と思われるが、黒色ではなく灰色がかっている。口縁外側は稜線状となる。復元口径は26cm程度。25は黒褐色を呈し全体が研磨されていると思われるが、上半（口縁部）には内外ともミガキ痕が残り、下半（底部）の破片には内外ともミガキ痕が観察されない。また上半と下半の接合部で破損した破片も多く、上半と下半を別々に作り、後から接合して全体を作り上げたことを想像させるような個体である。26も精製土器であり、内外ともミガキ仕上げ、復元口径16.6cmである。27は浅鉢の口縁部と思われる小破片である。口唇部を丸く作っている。28は粗製の深鉢の口縁部と思われる。口縁端から約4cm下に粗い凸帯を付けるが、刻みは無い。29～34は胴部の破片である。29は外面に貝殻腹縁によると思われる施文がある。30は屈曲のある胴部の破片で内外とも条痕による調整が施されている。31は胎土に多量の滑石を含む。32は屈曲のある胴部の破片であるが、僅かに残る上半部にはミガキが施され、下半部は条痕による調整となっている。33は粗製深鉢の胴部と思われる

破片で、内外とも条痕による調整。外面には炭化物が付着している。34は精製の浅鉢の胴部と思われる。内外ともミガキによる調整で焼成良く、硬質である。35～39は底部の資料である。35は小破片であるが、底径8.6cm程度に復元できる。36は底面がやや上げ底気味であり、平滑に作られている。37はやや小型の薄手の土器の底部と思われる。底径約10cmに復元できるかもしれない。38は接着部で破損した破片である。多量の滑石を含むことから阿高式系の土器の底部と思われる。39は胴部～底部の破片で、バケツ状の形である。焼成良く、硬質。胎土に滑石粉末を含んでいる。

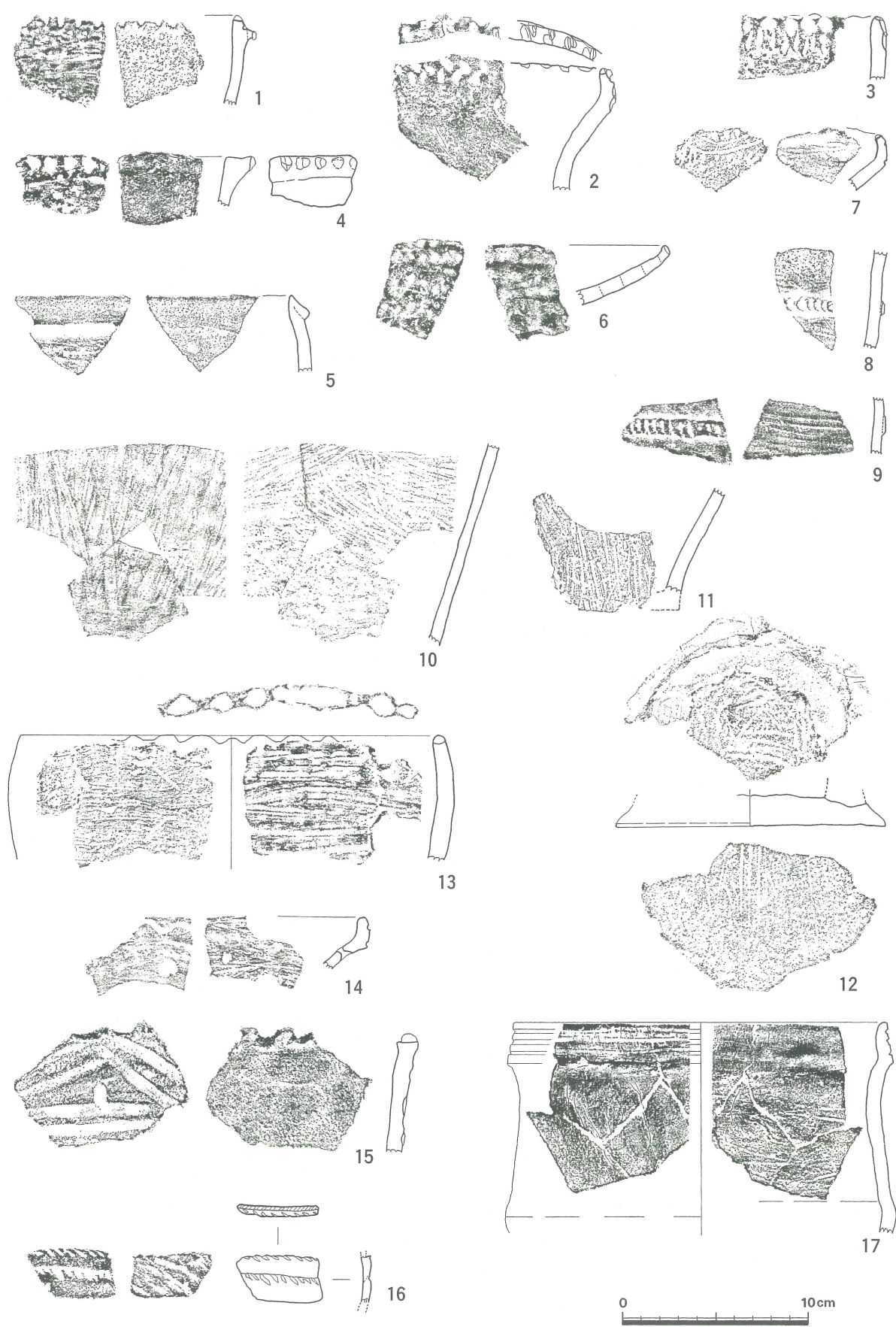
40～52は縄文土器以外の土器資料である。40は弥生前期かと思われる甕の破片で、低い凸帯に浅い刻みが入れてある。41は弥生後期の壺の口縁のように作図したが違和感がある。土師器の高杯の脚とすべきか。2c層からこれと良く似た破片が出土している。42は古式の土師器と思われる。磨耗しているため、調整は見えにくいだが、外面はナデと思われる。復元口径22.4cm。43は赤焼きの須恵器である。芯は灰色であるが、内外とも表面の1～2mmが赤化している。内面は同心円、外面は格子目のタタキである。やや風化している。44は瓦質土器の口縁である。細片のため口径は復元していない。内外とも横方向に良く磨かれているが、口唇頂部は口禿げ状となっている。焼成良く硬質である。出土層位が3層となっているのには疑問があり、何らかの事情で0～2層から落ち込んだものと考えられる。45～47は瓦質土器の底部で黒色を呈し、胎土に雲母（白）を含む。45は底面が曲線を描き、46の底面は中心部が凹んでいる。47はほぼ水平な底面である。48は軟質で灰白色の土師器である。底面の残りが少なく判断しにくいだが、板目・ヘラ切が観察されるようである。49～51は土錘である。49は小欠がある。重量は10gを僅かに上回ると判断される。瓦質で灰色を帯び、やや軟質である。胎土は精良で雲母粉末を含む。50、51は土師質の土錘で赤橙色に近い色合いである。50は胎土に雲母微粉末を含み、51の胎土には石英が観察される。52は輸入陶磁器の白磁と思われるが小破片のため詳細不明。生地は灰色であり、外面には虫食い状の釉の傷がある。

53～58は本調査に先立って実施された範囲確認調査時に出土した遺物である。53は縄文晩期の浅鉢の口縁と思われる。黒色の精製土器で、内外とも横方向のミガキが観察される。外面に1条の浅い沈線が付けられている。54は縄文土器の底部で粗製。復元底径10cm。55は灰色を呈する須恵器で、外面には格子目の、内面には平行線による条痕状のタタキが残る。56は薄い作りの土師器である。磨耗のため確認できないが、糸きり底と推定される。57は輸入陶磁器の白磁の皿で全体に傷みがある。復元底径6cm。58は青磁の碗で、範囲確認調査の3T出土の破片と、本調査時に0層から出土した破片が接合している。生地は灰褐色、釉は暗オリーブ色を呈し、見込みに切込みがある。畳付けから高台内面にかけては無釉。高台径6.5cm。57、58とも残存部分に文様は無い。

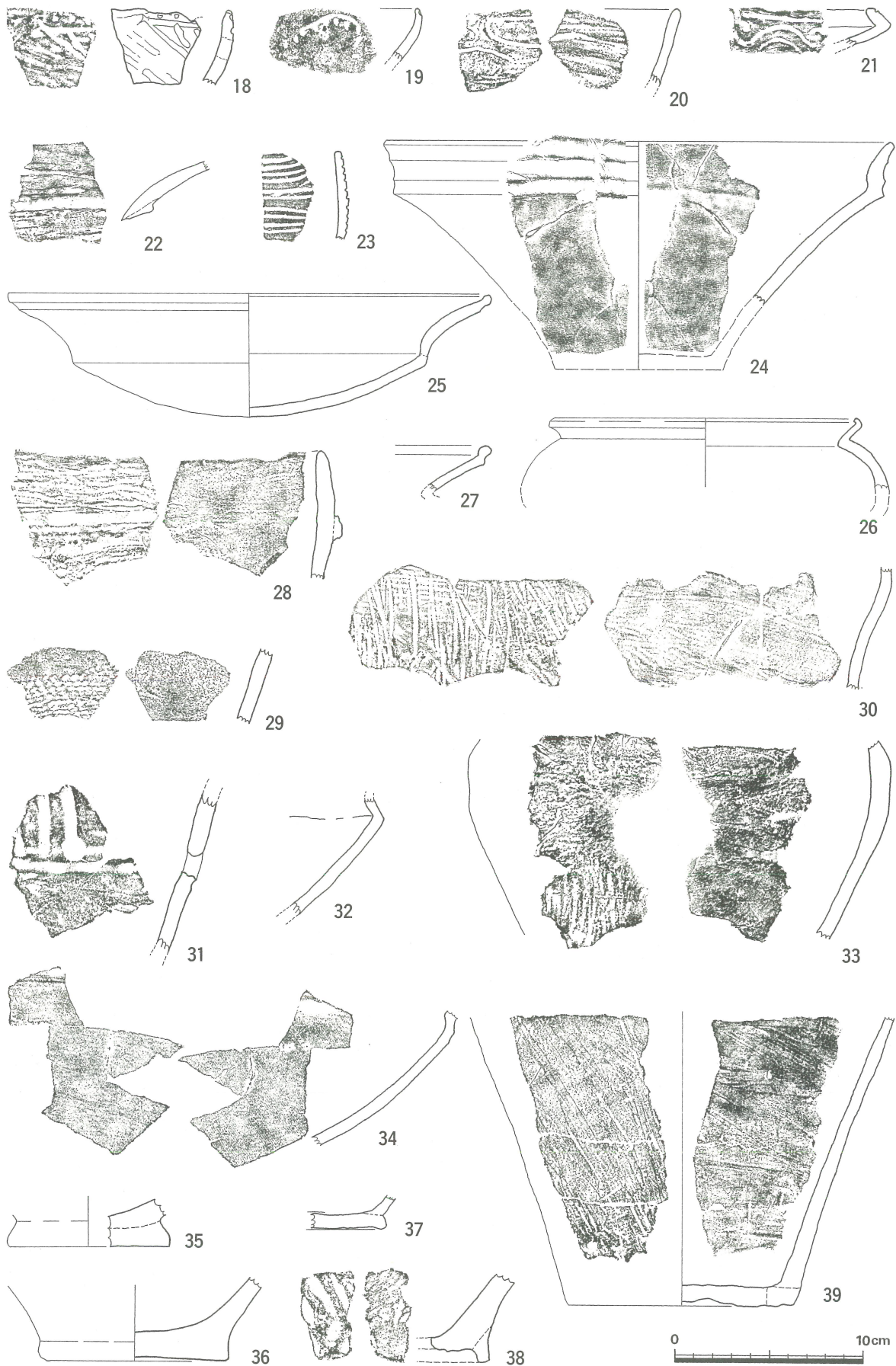
番号	遺物番号	層位	標高(m)	時期	器種	部位	焼成	*色調	精粗	主な粘土鉱物	調整手法	備考
1	240	3	0.553	中～後期	—	口縁部	良好	明炭灰	—	沸石多量	内面	内面に炭化物付着
2	953、961	3	0.466	中～後期	深鉢	口縁部	良好	暗赤灰	—	沸石多量	外面	内面に炭化物付着
3	751	3	0.532	中～後期	—	口縁部	良好	褐灰	—	沸石多量	—	外面に炭化物付着
4	977	3	0.550	中～後期	—	口縁部	良好	褐灰	—	沸石多量	—	磨耗している
5	164	3	0.507	中～後期	深鉢?	口縁部	良好	黒	—	沸石多量、角閃石	—	—
6	469	3	0.610	中～後期	浅鉢	口縁部	良好	黒	—	長石・角閃石	ナデ	磨耗 粘土継ぎ目観察できる
7	136	3	0.616	中～後期	浅鉢?	口縁部	良好	黒	—	長石・角閃石	ナデ	外面に炭線と刺突を組み合わせて施文
8	744	3?	0.539	中～後期	—	胴部	良好	黒	—	角閃石	—	—
9	241	3	0.539	中～後期	—	胴部	良好	にぶい橙	—	不明	—	—
10	581	3	0.637	中～後期	深鉢	胴部	良好	橙	—	沸石多量	条痕	—
11	944	3	0.639	中～後期	深鉢?	胴部	良好	にぶい橙	—	雲母・維粒子	ナデ	—
12	563	3	0.646	中～後期	—	底部	良好	橙	—	滑石	ハテ	—
13	592	0d	0.823	中～後期	—	口縁部	良好	黒褐	—	滑石多量	削り (条痕)	—
14	701	0d	0.684	中～後期	—	口縁部	良好	灰黄褐	—	滑石多量	条痕	—
15	602	2d	0.770	中～後期	—	口縁部	良好	暗赤褐	—	滑石多量	ナデ	穿孔あり
16	880	2d	0.834	後期?	—	口縁部	良好	灰黄褐	—	雲母	—	復元口径22.6cm
17	194	2	0.779	後期?	—	口縁部	良好	灰黄褐	—	滑石	—	外面に凹線文あり
18	726	2c	0.749	—	—	口縁部	不良	黒	—	長石・角閃石	ナデ	復元口径20cm
19	784	2d	0.556	—	—	口縁部	良好	黒褐	—	長石	叩き痕?	波状口縁の可能性
20	802	2d	0.539	—	—	口縁部	良好	黒	—	長石	ナデ	波状口縁の可能性
21	730	2d	0.669	—	—	口縁部	良好	暗赤褐	—	滑石	ナデ	波状口縁の可能性
22	5、6	0	0.952	後期?	深鉢?	口縁部	良好	黒	—	雲母	ミガキ	波状口縁の可能性 (黒色磨研土器)
23	483	2c	0.876	後期?	碗形?	口縁部	良好	黒褐	—	雲母	ミガキ	他地域からの輸入品である可能性
24	175	2b	0.813	後期～晩期	浅鉢	口縁部	良好	暗灰黄	—	角閃石・雲母	ミガキ	復元口径26cm
25	407	2c	0.817	晩期	浅鉢	口縁部	良好	黒褐	—	長石・角閃石・雲母	ミガキ	復元口径25.6cm・器高6.5cm
26	460	1	0.949	晩期	浅鉢	口縁部	良好	黒褐	—	長石・角閃石	ミガキ	復元口径16.6cm
27	676	0	1.009	晩期	浅鉢	口縁部	良好	黒褐	—	長石・角閃石	ミガキ	磨耗あり
28	456、458	1	0.986	晩期	深鉢?	口縁部	良好	黒褐	—	角閃石	条痕	波状口縁の可能性
29	908	2d	0.424	前期?	—	胴部	良好	黒	—	長石・角閃石	ナデ	—
30	921	0b	0.874	晩期?	深鉢?	胴部	良好	褐	—	雲母	条痕→ナデ	—
31	555	2f	0.777	中期	深鉢?	胴部	良好	赤褐	—	沸石多量	ナデ	天地不詳
32	972	1	0.850	中～後期	浅鉢?	胴部	良好	黄灰	—	長石・角閃石	ナデ	穿孔あり
33	933、936、946	1	0.903	晩期?	浅鉢?	胴部	良好	黒	—	長石・角閃石	ミガキ・条痕	上半はミガキ、下半は条痕と思われる
34	1026	1	0.864	晩期	浅鉢	胴部	良好	黒	—	貝殻粉末	条痕	復元口径22.2cm
35	44	2b	0.884	—	浅鉢	底部	良好	にぶい橙	—	角閃石・雲母	ミガキ	—
36	825	2c	0.925	—	—	底部	良好	橙	—	長石・角閃石	ナデ	—
37	881、886	2d	0.834	—	—	底部	良好	にぶい橙	—	長石・角閃石	ナデ	—
38	547	1	0.853	—	—	底部	良好	赤褐	—	長石・角閃石	ナデ	—
39	538	2d	0.802	—	—	底部	良好	赤褐	—	滑石多量	ナデ	—
40	498	1	0.917	前期?	甕	胴部	良好	にぶい黄褐	—	滑石	削り	接層部で剥離している
41	40	0	0.991	後期?	甕	口縁部	良好	灰白	—	石英・雲母	ナデ	底径12cm
42	833	2c	0.957	古式土師器	—	口縁部	良好	灰白	—	雲母	ナデ	凸帯に刻み
43	58	0	0.979	須重器	—	胴部	良好	赤橙	—	石英	ヨコナデ	脚部の可能性もあり 暗文あり
44	959	3	0.447	瓦質土器	—	口縁部	良好	赤橙	—	石英	格子目タタキ	赤く焼けている
45	285	0	0.981	瓦質土器	坏	底部	良好	黒	—	雲母	ミガキ	上層からの混入と思われる
46	341	2b	0.988	瓦質土器	坏	底部	良好	黒	—	雲母	ミガキ	復元口径6.6cm
47	397	2c	0.956	瓦質土器	坏	底部	良好	黒	—	雲母	ミガキ	復元口径7.4cm
48	546	0d	0.866	土師質土器	坏	口縁部～底部	軟調	灰白	—	雲母	ミガキ	復元口径8.2cm
49	80	2b	0.887	土師質土器	土錘	碗形	軟調	褐灰	—	雲母	ナデ	復元口径13.6cm、底径10.2cm、高さ3cm
50	123	2b	0.739	土師質土器	土錘	碗形	良好	赤褐	—	雲母	ナデ	長4.1cm、径1.85cm、穴径0.55cm、重10g
51	159	2b	0.689	土師質土器	土錘	碗形	良好	にぶい橙	—	雲母	ナデ	長4.3cm、径1.2cm、穴径0.35cm、重5.1g
52	276	0	1.034	白磁	小杯	口縁部	良好	灰白	—	石英	ナデ	長4.5cm、径1.3cm、穴径0.4cm、重5.4g
53	2T-1			縄文	浅鉢	口縁部	良好	黒	—	雲母	ミガキ	外面に小さな虫食い
54	2T-6			縄文	—	底部	良好	黒	—	雲母	—	内面黒化
55	3T-4			須重器	—	胴部	良好	灰色	—	長石・角閃石	—	—
56	1T-1			土師質土器	坏	口縁～底部	良好	浅黄橙	—	雲母	格子目タタキ	—
57	4T-H			白磁	皿	底部	良好	オリーブ灰	—	—	ナデ	推定糸切り底
58	3T-5	0.0b、0c		青磁	甕	胴部～底部	良好	青オリーブ	—	—	—	見込みに切り込みあり

*「色調」については「新版 標準土色帖」1994を用いて判断した。

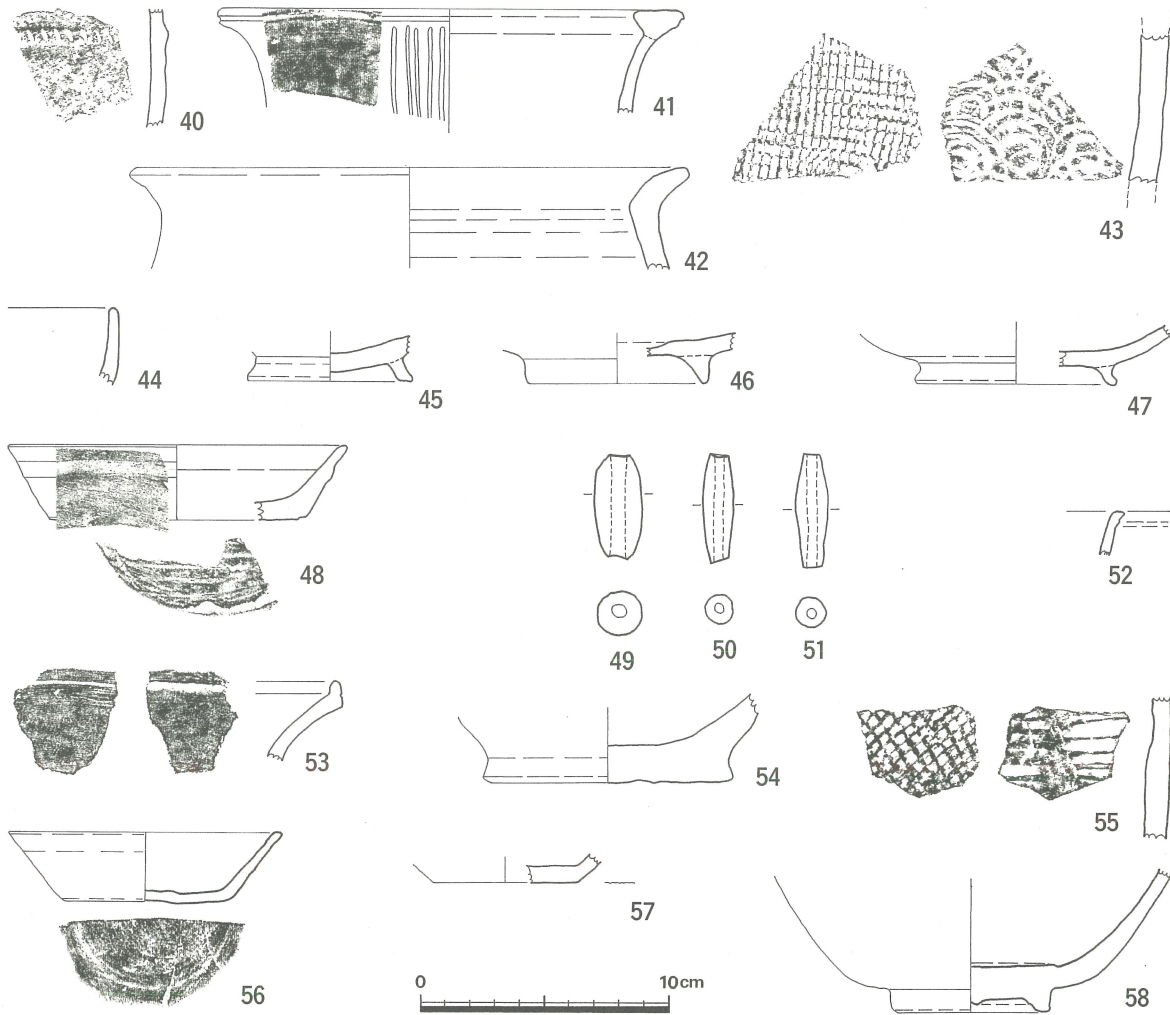
第2表 土器観察一覧表



第7图 土器実測图1 (1~17、S-1/3)



第8图 土器実測図2 (18~39、S-1/3)



第9図 土器実測図3 (40~52、S-1/3)

— 2. 石器 (第10, 11図、第3, 4表、図版5, 6)

1は台形石器で、打瘤部は除去している。両側縁は左方は主要剥離面側から、右縁は両面から急傾斜剥離を行う。その後、背面部に横方向からの平坦剥離を行う。原の辻型台形石器である。2は石鏃で両脚を欠損する。調整は周縁より丁寧に行われ、剥離面の痕跡を残さない。3~5は石匙で、3は薄い剥片を利用した横型の石匙で、刃部は両面から施刃している。4は体幹中位から折損するものでやや縦長のものと思われる。施刃及び抉り部の調整は片面のみから行う。5は主要剥離面は周縁から丁寧に調整している。また主要剥離面側からの加圧により折損している。6は不定形剥片を利用した例で、下面には急傾斜剥離を実施して施刃し、また上位には細調整を行って刃部を作出し、削器として機能させている。7~10は削器で、7はやや厚手の剥片を素材に、背面から施刃している。8も不定形の剥片を素材として、背面から施刃している。9は自然面を残す縦長剥片を素材として下半部に施刃している。10は縦長の不定形な剥片を素材にしている。刃部は主要剥離面側に背面から行う。全体に水磨により滑らかである。11は単設打面を有する石核で、3面に剥離痕を残している。不定形の剥片を作出している

が、最終の2回の剥離がステップ・エンドで剥離できなかつたため、石核の機能を停止している。12~14は双角状の石器である。2つの尖頭は同じ高さを有するものでなく、片方は高く、他方は低いというもので、2つの尖頭間の凹部はともに浅く抉られている。12はこの凹部から高い尖頭部にかけて使用による摩滅が見られる。15~19は尖頭状の突起部を1箇所有するものである。

20~28は石錘である。転石の両側に浅い抉りを入れて機能させるものと、28のように円礫の周りにミズ上に浅く掘りくぼめて機能させる両者が存在するが、前者の例が多数である。29・30は碓石と想定される石器で、30は石核の可能性も残っている。

器種	層位															暗渠	計	トレンチ		合計
	0	1	2	3	4	0b	0c	0d	2b	2c	2d	2e	2f	3?	3T					
尖頭状石器	2					1				1	2	1					7	尖頭状石器		7
双角状石器				3	1												4	双角状石器		4
石錘			1	5		2						1					9	石錘		9
有溝石錘											1						1	有溝石錘		1
石匙						1				1	1						3	石匙		3
抉入石器				1	1					1							3	抉入石器		3
搔器	1																1	搔器		1
二次加工石器				1													1	二次加工石器		1
石核				2	1				1		1						5	石核		5
削器	2		1	1			1	1	1							1	8	削器	1	9
鋸歯縁石器							1			1	1						3	鋸歯縁石器		3
使用痕のある石器										3							3	使用痕のある石器	1	4
砥石		1															1	砥石		1
剥片	6			12	1	14	2	4	2	10	19	2			4	76	剥片		6	
削片	14		4	6	3	2		4	3	6	17	2				61	削片	39	100	
軽石				1					1								2	軽石		2
碓石				2													2	碓石		2
台形石器				1													1	台形石器		1
計	25	1	6	35	7	20	4	9	8	23	42	6	0	0	5	191	計	47	238	

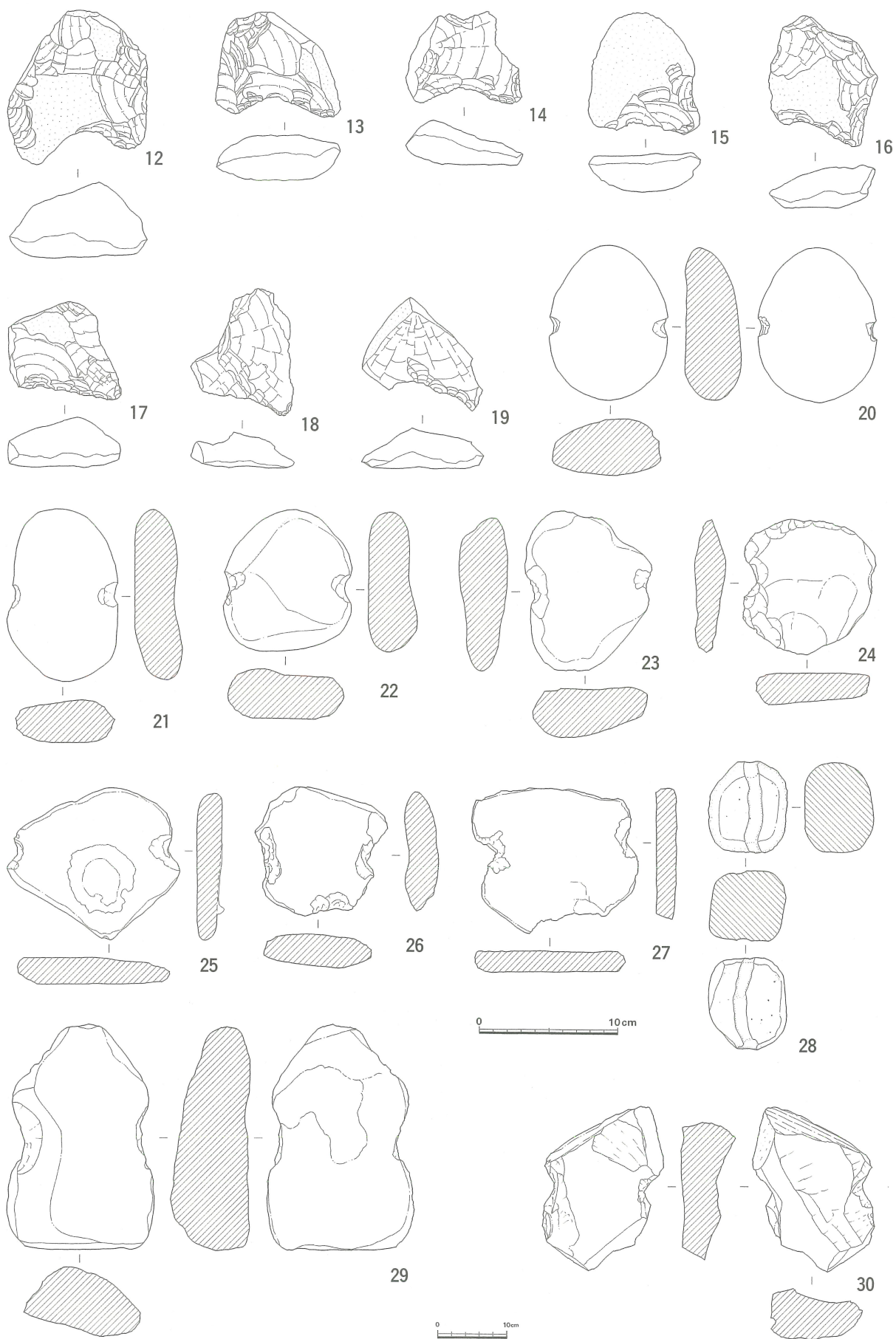
第3表 石器器種別・層位別一覧表

No	記号・番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	出土標高(m)	出土層位	備考
1	09NT794	台形石器	黒曜石	24	25	8	2.8	0.471	3	
2	廃土3	石鏃	黒曜石	27	14	4	0.7			
3	09NT897	石匙	安山岩	65	29	7	9.9	0.820	0b	
4	09NT445	石匙	玄武岩	35	39	4	7.7	0.947	2c	
5	09NT801	石匙	安山岩	30	39	10	9.2	0.603	2d	
6	09NT321	搔器	玄武岩	48	33	9	13.9	0.994	0	水磨
7	09NT305	削器	玄武岩	29	33	10	15.8	0.997	0	
8	09NT618	削器	角閃石安山岩	48	37	10	15.4	0.735	0d	
9	廃土1	削器	黒曜石	45	21	9	7.4			
10	09NT737	削器	安山岩	33	73	13	35.3	0.653	3	
11	09NT930	石核	黒曜石	30	33	22	24.3	0.807	2b	
12	09NT786	双角状礫器	角閃石安山岩	100	111	54	535.8	0.461	4	
13	09NT216	双角状礫器	角閃石安山岩	91	76	33	233.8	0.661	3	
14	09NT657	双角状礫器	角閃石安山岩	85	66	32	145.8	0.535	3	
15	09NT1028	尖頭状石器	角閃石安山岩	81	87	28	222.9	0.618	2e	
16	09NT646	尖頭状礫器	角閃石安山岩	79	94	30	207.8	0.595	3	
17	09NT769	尖頭状石器	角閃石安山岩	81	71	36	197.7	0.680	2d	
18	09NT719	尖頭状石器	角閃石安山岩	75	91	25	99.4	0.953	0b	
19	09NT780	尖頭状石器	角閃石安山岩	87	81	29	121.8	0.551	2d	
20	09NT655	石錘	角閃石安山岩	85	111	41	410.6	0.737	3	
21	09NT654	石錘	角閃石安山岩	80	124	41	366	0.705	3	
22	09NT652	石錘	角閃石安山岩	94	102	36	468.7	0.668	3	
23	09NT653	石錘	角閃石安山岩	91	114	36	435.3	0.707	3	
24	09NT850	石錘	角閃石安山岩	95	96	23	260.6	0.783	0b	
25	09NT218	石錘	榎輝石安山岩	124	109	19	348.4	0.745	2	カキ付着
26	09NT998	石錘	角閃石安山岩	96	93	25	274.6	0.524	3	
27	09NT624	石錘	角閃石安山岩	121	105	15	318.3	0.649	2e	
28	09NT768	有溝石錘	角閃石安山岩	65	56	50	289.9	0.687	2d	
29	09NT795	碓石	榎輝石安山岩	212	323	116	6800	0.519	3	
30	09NT797	碓石	角閃石安山岩	173	237	73	3200	0.618	3	

第4表 石器属性一覧表



第10图 石器实测图1 (1~11、S-2/3)



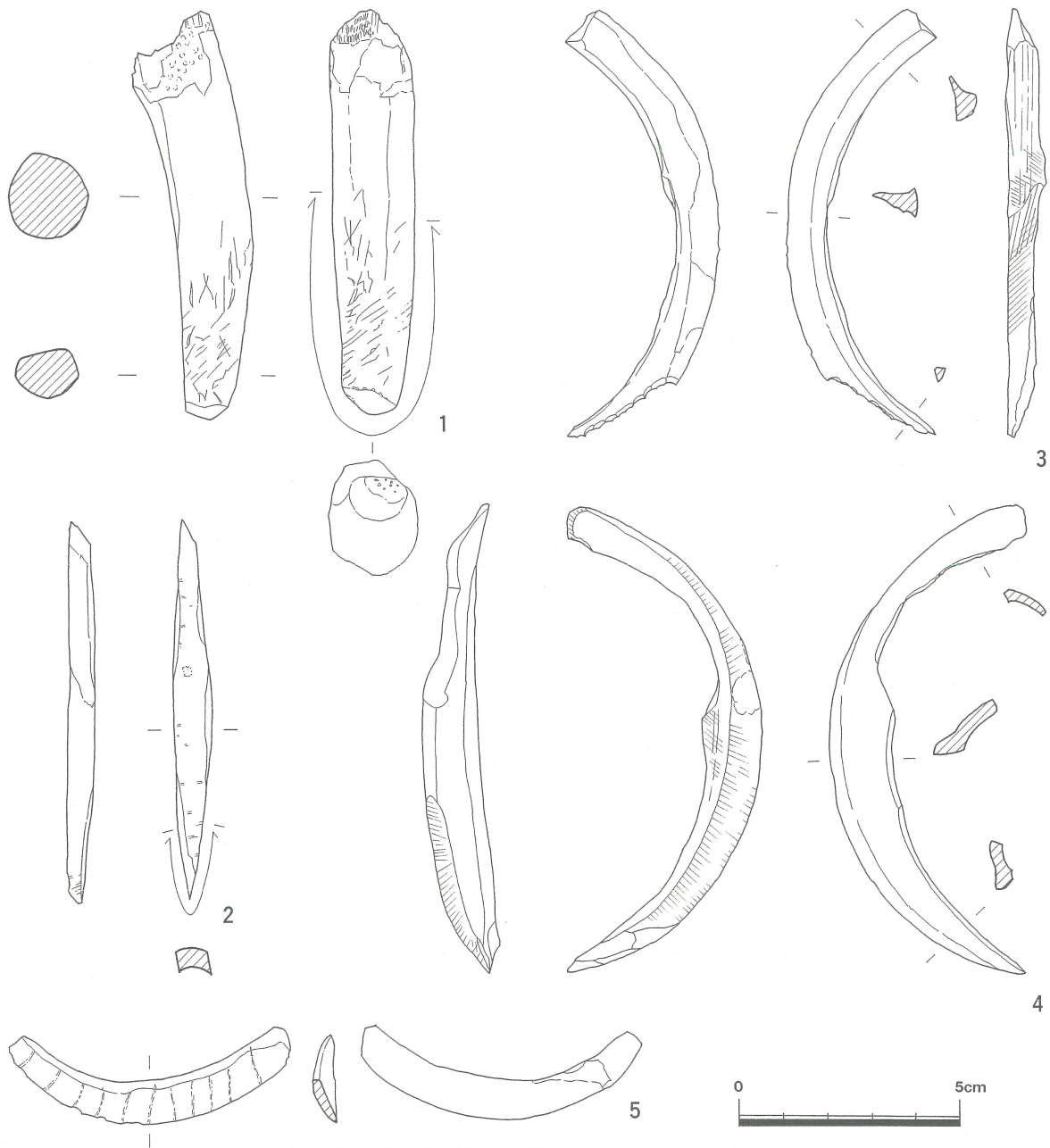
第11図 石器実測図2 (12~30はS-1/4、29・30は1/8)

— 3. 骨角牙貝製品 (第12図、第5表、図版9)

1 はニホンシカの枝角を利用した道具で、先端部は海綿部が露出するほどに使用し、その際の痕跡が周縁に線条痕として残っている。色調は明黄褐色 (Hue2.5Y) を呈し、光沢を見せている。2 はニホンシカの撓骨と思われる部位を打割して先端部を鋭利に調整し、錐的な機能をしている。3 はニホンシカの下顎体左犬歯、4 はニホンシカの下顎体右犬歯、5 はアワビの貝輪加工品。

No	遺物番号	大分類	小分類	部位	出土標高(m)	層位	備考
1	173	哺乳綱	ニホンシカ	鹿角	0.473	3	研磨・整形 道具として先端部を使用
2	848	動物遺存体		打割品	0.460	4	イノシシ? 撓骨あたりを打割し、先端部を使用
3	975	哺乳類 加工品	イノシシ	下顎体左犬歯	0.520	3	
4	201	哺乳類 加工品	イノシシ	下顎体右犬歯	0.526	3	
5	1016	腹足綱	アワビ	貝輪加工品	0.790	1	腹縁部を研磨・加工

第5表 骨角牙貝製品一覧表



第12図 骨角貝製品実測図 (1~5、S-2/3)

持たせたものと思われる。先端部はやや摩滅し、長軸に直交する線条痕が残っている。3はイノシシ下顎体左犬歯腹面、4は下顎体右犬歯外面を利用した道具で、錐的機能を持たせたものと想定される。3の内縁部は鋭利な剥片類で丁寧に削って仕上げ、先端部は細かい剥離によって仕上げている。4は内縁部・刃部ともに鋭利な剥片によって削り込んで仕上げている。長軸に直交する線条痕を看取することができる。5はアワビの周縁部を丁寧に加工して仕上げた貝輪片で、放射肋が残らないくらいにヨコ方向に加工している。

ー 4. 動物遺存体 (第 6, 7 表、図版 7~9)

ドットで取り上げたのは55件58点で、範囲確認調査・本調査・表土出土の遺物も加えている。

1~24はニホンシカである。2は下顎体資料で歯式は第6表である。後臼歯摩滅指数は「2」~「3」程度である。4・5は軸椎であり2体以上は捕獲されたことを示している。3層に包含される資料で、他は遊離したものと思われる。

25~36はイノシシである。25・26・29・30は上顎体・下顎体資料で歯式は第6表に示した。26の歯摩滅指数は「b」レベル、30は「c」レベルである。眼窩資料が2点存在し、2体以上を

ニホンシカ歯式 資料番号27 (09NT217)

		l ₁	l ₂	l ₃	C	P ₁	P ₂	P ₃	M ₁	M ₂	M ₃
下顎体	R	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	L	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○

資料番号2 09NT217

×……遊離歯

後臼歯摩滅指数 (大森司1980) では「2」~「3」

イノシシ

		l ₁	l ₂	l ₃	C	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃
上顎体	R	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○
	L	×	×	×	×	閉合	○	○	○	○	○	○
下顎体	R	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○
	L	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○

資料番号25 09NT742

資料番号26 09NT12

×……遊離歯

閉合……未崩出

下顎歯摩滅指数 (Bull and Payne1982) からすると「b」レベル

下顎体 R の P₂ は折り取っている

		l ₁	l ₂	l ₃	C	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃
上顎体・右半	R	欠	欠	欠	欠	欠	×	○	○	○	○	○

資料番号29 09NT29

欠……欠損

×……遊離歯

摩滅指数 (Bull and Payne1982) からすると「a」レベル

		l ₁	l ₂	l ₃	C	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃
下顎体・左半	L	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○

資料番号30 09NT27

×……遊離歯

摩滅指数 (Bull and Payne1982) からすると「c」レベル

第6表 ニホンシカ、イノシシ歯式

No	遺物番号	大分類	小分類	部位	出土標高(m)	層位	備考
1	984	哺乳綱	ニホンシカ	前頭骨～後頭骨	0.579	3	
2	217	哺乳綱	ニホンシカ	下顎体	0.485	3	
3	552	哺乳綱	ニホンシカ	鹿角 L	0.533	3	角座下から枝角上遺存 全体に風化
4	2001	哺乳綱	ニホンシカ	軸椎			NO2001 注記09NT・2T-5
5	2002	哺乳綱	ニホンシカ	軸椎			NO2002 注記09NT・H-2H
6	625	哺乳綱	ニホンシカ	頸椎	0.589	3	
7	980	哺乳綱	ニホンシカ	頸椎	0.513	3	
8	941	哺乳綱	ニホンシカ	頸椎	0.434	3	
9	510	哺乳綱	ニホンシカ	頸椎	0.459	3	
10	155	哺乳綱	ニホンシカ	頸椎	0.928	0	
11	759	哺乳綱	ニホンシカ	椎骨	0.498	3	
12	2005	哺乳綱	ニホンシカ	仙骨	0.743	2層	NO2005 注記09-2NT3T・1
13	2003	哺乳綱	ニホンシカ	椎骨			NO2003 注記09NT・H3-H
14	187	哺乳綱	ニホンシカ	椎骨	0.839	2b	
15	986	哺乳綱	ニホンシカ	肩甲骨 L	0.468	3	
16	757	哺乳綱	ニホンシカ	肩甲骨 R	0.563	2d	
17	793	哺乳綱	ニホンシカ	上腕骨 R	0.519	0c	近位部を欠損する
18	1012	哺乳綱	ニホンシカ	上腕骨 R	0.474	3	遠位部のみ
19	976	哺乳綱	ニホンシカ	シカ 橈骨 R	0.464	3	
20	749	哺乳綱	ニホンシカ	撓骨 L	0.462	4	
21	121	哺乳綱	ニホンシカ	尺骨 R	0.755	2b	
22	2006	哺乳綱	ニホンシカ	大腿骨 L			NO2006
23	792	哺乳綱	ニホンシカ	大腿骨か?打割品	0.562	2e	
24	90	哺乳綱	ニホンシカ	中手骨 R	0.911	1	
25	742	哺乳綱	イノシシ	イノシシ 頭蓋骨	0.419	3?	
26	12	哺乳綱	イノシシ	下顎体	0.632	3	
27	213	哺乳綱	イノシシ	頭蓋片 L	0.398	4	
28	29	哺乳綱	イノシシ	後頭～眼窩	0.474	3	眼窩部2ヶあり 5片接合f-1
28	29	哺乳綱	イノシシ	R眼窩～頂頭部内片	0.474	3	e f-1に施癒合する近位のもの
28	29	哺乳綱	イノシシ	R眼窩片	0.474	3	外に3片あり
29	29	哺乳綱	イノシシ	上顎体R半分	0.474	3	
30	27	哺乳綱	イノシシ	下顎体 R	0.439	3	
31	2007	哺乳綱	イノシシ	左下顎犬歯	0.68	3	NO2007 注記09-2NT・4T-1
32	2004	哺乳綱	イノシシ	腰骨	0.743	2層	NO2004 注記09-2NT3T・1
33	746	哺乳綱	イノシシ	撓骨 R	0.491	3?	
34	748	哺乳綱	イノシシ	撓骨 R	0.435	4	
35	450	哺乳綱	イノシシ	大腿骨 R	0.925	1	
36	2010	哺乳綱	イノシシ	寛骨L	0.784	2"層	NO2010 注記09-2NT・3T-3
36	2010	哺乳綱	イノシシ	寛骨R	0.748	2"層	NO2010 注記09-2NT・3T-2
37	203	哺乳綱	ヒト	頭頂骨片	0.474	3	
38	104	哺乳綱	クジラ類?		0.966	1	
39	139	哺乳綱	クジラ類?		0.909	1	
40	140	哺乳綱	クジラ類?		0.908	1	
41	141	哺乳綱	クジラ類?		0.896	1	
42	142	哺乳綱	クジラ類?		0.901	1	
43	143	哺乳綱	クジラ類?		0.929	1	
44	144	哺乳綱	クジラ類?		0.931	1	
45	145	哺乳綱	クジラ類?		0.918	1	
46	153	哺乳綱	クジラ類?		0.927	1	
47	154	哺乳綱	クジラ類?		0.914	1	
48	180	哺乳綱	クジラ類?		0.839	2	
49	181	哺乳綱	クジラ類?		0.861	2	
50	747	哺乳綱		不明	0.446	3?	
51	750	哺乳綱	不明	肩甲骨?	0.467	0c	
52	924	哺乳綱	クジラ類?		0.841	暗渠	
53	74	哺乳綱	クジラ類?		0.957	0	
54	978	動物遺存体		鳥骨	0.267	3	
55	1023	動物遺存体		鳥骨	0.529	3	
56	168	哺乳綱		歯牙	0.418	3	
57	210	哺乳綱		歯牙	0.479	3	
58	2008	軟骨魚綱	サメ				NO2008 サメ歯牙(本調査)
59	167	硬骨魚綱	魚類	擬鎖骨?	0.421	3	
60	935	硬骨魚綱	スズキ目スズキ	主鰓蓋骨 L	0.891	1	
61	938	硬骨魚綱	スズキ目スズキ	主鰓蓋骨 L	0.617	暗渠	
62	969	硬骨魚綱	スズキ目スズキ	主鰓蓋骨 L	0.502	3	
63	985	硬骨魚綱	スズキ目スズキ	主鰓蓋骨 L	0.562	3	
64	996	硬骨魚綱	スズキ目スズキ	主鰓蓋骨 L	0.505	3	
65	1027	硬骨魚綱	スズキ目スズキ	主鰓蓋骨 R	0.367	3	
66	2009	硬骨魚綱	スズキ目スズキ	主鰓蓋骨 R	0.52	3	NO2009 注記09-2NT・4T-2

第7表 動物遺存体一覧表

捕獲している。ニホンシカ同様3層資料である。

37はヒトの頭蓋頭頂～後頭部資料で3層から出土した。同層においては土壙墓などの遺構が確認されていないため、他所からの遊離遺物と思われる。

38～53は海獣骨資料、54・55は鳥骨資料、56・57は陸棲獣の歯牙と思われる。

58はネズミザメの歯牙で、穿孔などはされていない。

59～66は魚骨資料で、59は前鰓蓋骨、60～66はスズキの主鰓蓋骨と想定され、左右が存在する。他の部位の検出はなされなかった。

－ 5. 植物遺存体

植物遺存体は第8表に掲げた。チャンチンモドキの核果やマツの球果が3層を主に検出されている。

番号	遺物番号	種名	標高(m)	層位
1	163	チャンチンモドキ核果	0.505	3
2	202	木質遺存体	0.508	4
3	224	チャンチンモドキ核果	0.680	0c
4	225	チャンチンモドキ核果	0.693	2
5	796	植物遺存体	0.519	0c
6	947	マツ球果	0.580	3
7	950	マツ球果	0.610	3
8	954	チャンチンモドキ核果	0.417	3
9	956	植物遺存体	0.408	2
10	958	マツ球果	0.540	3
11	964	マツ球果	0.473	3
12	966	チャンチンモドキ核果	0.456	2
13	967	マツ球果	0.418	3
14	983	マツ球果	0.796	1
15	1001	マツ球果	0.530	3
16	1009	マツ球果	0.492	3

第8表 植物遺存体一覧表

－ 6. ブロック・サンプル分析

ブロック・サンプル（以下、「B.S.」と略記。）はB.S.2がG8グリッドの北壁3層（暗青灰色混土貝層）から採取し、標高は0.48～0.58mである。B.S.6はF9グリッドの東壁3層（暗青灰色混土貝層）の標高0.43～0.52mから採取した。1層資料はB.S.5がF9グリッド東壁1層（暗灰茶褐色混砂貝層）から採取し、標高は0.7～0.8m、B.S.7はE8グリッド北壁1層（暗灰茶褐色混砂貝層）、標高0.85～0.94mで採取した。即ちB.S.5とB.S.6は上下の関係にある。

採取した各ブロック・サンプルは6mm、3.5mm、1.0mmの篩（ふるい）で水洗いしながら採取した。

採取した貝類は、二枚貝綱、腹足綱（巻貝）に分類され、同定の結果を第9表に掲載した。

貝の計数については、巻き貝の破片は殻口部の残る螺層の4階以上の破片を数え、二枚貝については、マガキ以外は殻頂まで残存するものを計数し、マガキは殻を左殻、右殻を別々に数えて多いほうを採用した。

フジツボ類もカキ殻の投棄された付近に生息していたと思われるが、バラバラになったフジツボ類の微小の殻が見られ、今回は計数しないことにした。

今回の資料は貝種12種であり、平成9年に実施した前回調査の18種と比べ減少している。

3層資料であるB.S.2においては、二枚貝であるマガキが多数を占め56%の比率を示し、B.S.6においてはマガキの比率が若干低下し23.9%であった。

一方1層資料のB.S.5ではマガキの比率が6.2%、B.S.7で9.4%と低い比率を示している。また巻貝であるヘナタリはB.S.5で90%、B.S.7で53.4%と高比率を示しており、3層資料との際立った違いを見せている。

以上が今回のブロック・サンプルの同定結果であるが、前回調査のブロック・サンプル・データと比較して、前回は下位層に自然貝層が検出されたのに対し、今回は上位層に自然貝層が確認された。これは、3層に廃棄行為が行われた後、遺跡としての機能を喪失したものと思われるが、前回調査地点と「場」の機能の相違を示しているのであろう。今回調査の3層においては、ハイガイなどの貝種が多く確認され、前回分と大きく異なっている点も、これを証左しているものと想定される。

No	採取場所	サンプル名	F9 東壁		E8 北壁		G8 北壁		F9 東壁	
			B.S.5		B.S.7		B.S.2		B.S.6	
			1層		1層		3層		3層	
	種名(和名)	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	
1	二枚貝	マガキ	17	6.18	22	9.48	40	56.34	21	23.9
2		カリガネエガイ	0	0	0	0	2	2.82	1	1.14
3		ヒメシラトリガイ	0	0	0	0	3	4.23	9	10.23
4		マツカゼガイ	1	0.36	1	0.43	0	0	0	0
5		ハイガイ	4	1.45	7	3.02	1	1.41	4	4.55
6		アゲマキガイ	3	1.09	0	0	0	0	0	0
7		テリザクラガイ	4	1.45	0	0	0	0	0	0
8	巻貝	ヘナタリ	246	89.5	196	84.5	24	33.8	47	53.4
9		タマキビガイ	0	0	4	1.72	1	1.41	1	1.14
10		ウミニナ	0	0	0	0	0	0	4	4.55
11		ツメタガイ	0	0	1	0.43	0	0	1	1.14
12		カワザンショウガイ	0	0	1	0.43	0	0	0	0
		計	275	100	232	100	71	100	88	100

第9表 貝類分析表

No	種名		5ブロック	6ブロック	7ブロック	8ブロック	9ブロック	12ブロック
1	ハイガイ	右殻	30	77	136	110	81	0
		左殻	46	73	130	117	80	0
		合殻				2	1	
2	マガキ	左殻	2	1	3	7	52	8
		右殻		1	1	3	19	7
3	アサリ			2	3	6		
4	アゲマキ			3				
5	レイシ				2			
6	ヒメシラトリガイ					4		

第10表 3層採取貝類一覧表

V 総 括

今回調査を実施した部分は、平成9年度に調査を行った箇所から東に100m強の地点であり、同一遺跡と見なされる。

前回調査分との層位の対比は、今次3層が前回3層に比定され、暗青灰色の混土貝層である。今次の1層は前回では確認されていない。

遺物では、前報告で平拵式として報告した刺突押引文土器（第14図18）と同様の文様構成を持つ例（第8図29）が存在するが、曾畑式系統の明確な例は確認されなかった。ただ3層・4層出土の土器類には滑石を多量に含み、内外面に貝殻条痕文を有する例が多く認められることから、前回地点とは同時異相の状況を示しているものと想定される。また、春日式系の土器（第7図2など）が検出されたのは本市では初例の遺跡である。

動物遺存体は前回資料と加味するとやや纏った資料の提示が行えた。基本はニホンシカ、イノシシを主たる捕獲対象としているが、遺存体数は多いとはいえない。

植物遺存体では前回同様チャンチンモドキ核果やマツ球果が3層主体に検出されている。3層に包含されるこれらの遺物は波によって運ばれたもので汀線間際、あるいは満潮時海没する状況を示しているのであろう。

貝類の同定は1層、3層採取のブロック・サンプルで行った。3層サンプルのデータは前回報告の人工貝層に近似しているが、層位的に上位の1層サンプルは前回報告の試4 TB.S.2や試6 TB.S.2の青灰色自然貝層に近いデータを示している。すなわちヘナタリなどの巻貝類が高い比率を示し、このことは3層より上位が生活残滓の廃棄場所として機能しなかったことを示しているようだ。また3層中において任意に採取したハイガイが460点ほどあり、前回調査地点との際立った違いを見せている。

さて、標高0.5m前後から堆積する本貝塚では、チャンチンモドキなどの植物遺存体が漂着している。このことは0.5m付近が当時の満潮時の最高海水準を示しているものと思われ、当時の平均海水準は標高-2m前後にあったと想定される。これは気象庁発表の潮汐観測資料・観測基準面の標高が口之津では-341.5cm、大浦では-373.1cm（いずれも2011年2月データ）であり、当時の環境が現在より若干温暖であったといえよう。

骨角器などの二次製品は前回調査においては未検出であったが、今回4点が確認された。ニホンシカの角を利用した二次製品やイノシシ犬歯を利用した道具などは熊本県の黒橋貝塚例に近似している。

また人骨片が確認されたことは特筆される。3層貝層中での検出であるが、頭蓋片であり同層中において土壙墓などの検出がないため、近くからの遊離と思われる。よって近傍に埋葬域の存在が確認される可能性が高く、生活域・生産域・埋葬域の三類型のうちの二類型を確認したといえよう。

参考文献

- 多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編 『伊木力遺跡』 1990
熊本県教育委員会 『黒橋貝塚』 1998
鳥栖市教育委員会 『蔵上遺跡Ⅲ』 2000
宇土市教育委員会 『轟貝塚』 2008
松井章 『動物考古学』 2008
波部忠重・小菅貞男共著 『原色世界貝類図鑑Ⅰ・Ⅱ』（初版11刷・初版10刷） 1991

圖 版



1-1 遺跡遠景



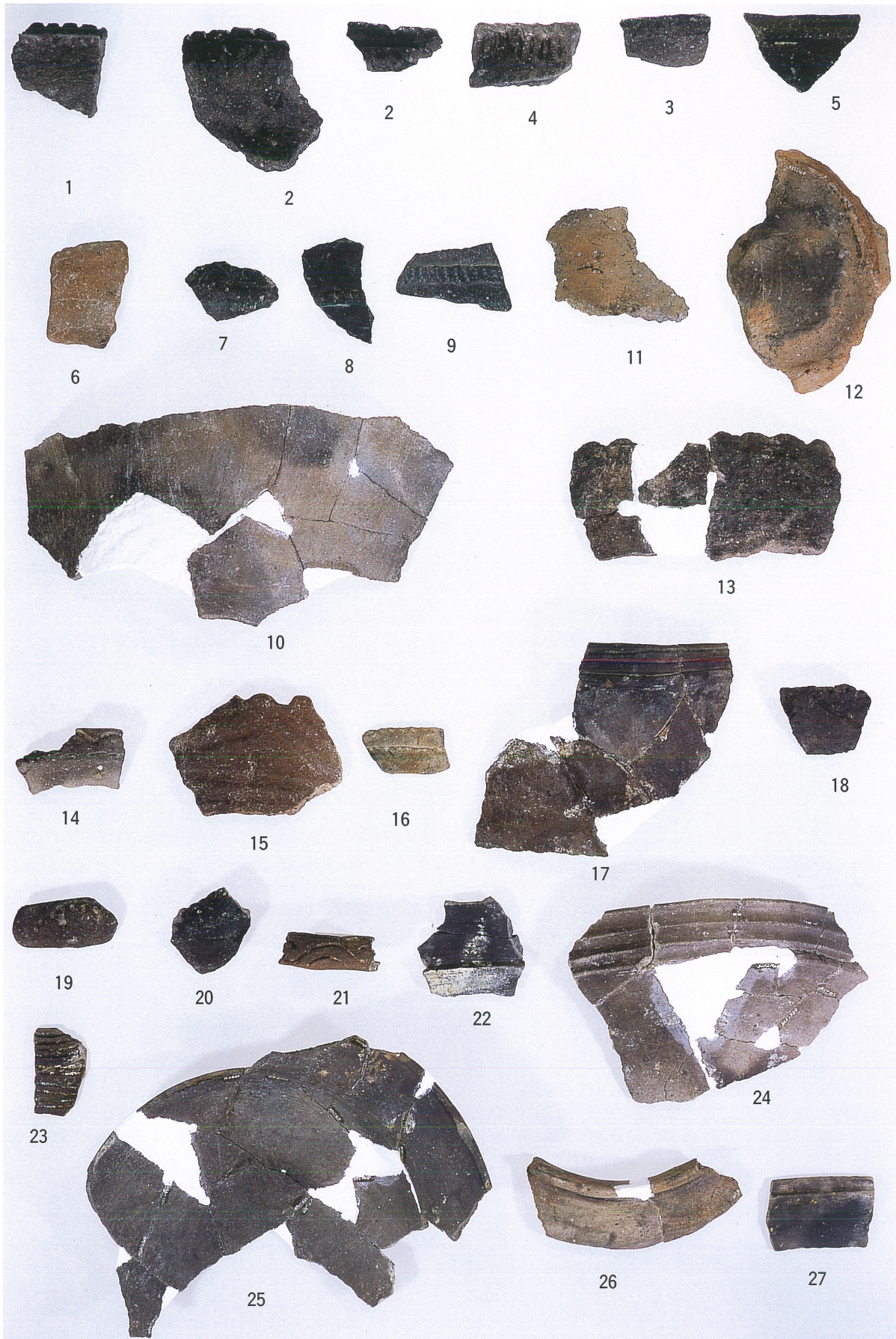
— 2 範囲確認調査 1 T 西壁土層断面及び 1 層中土師質土器 (56) 出土状況



— 1 G 7 東壁土層断面及び 3 層中碓石 (29) 出土状況



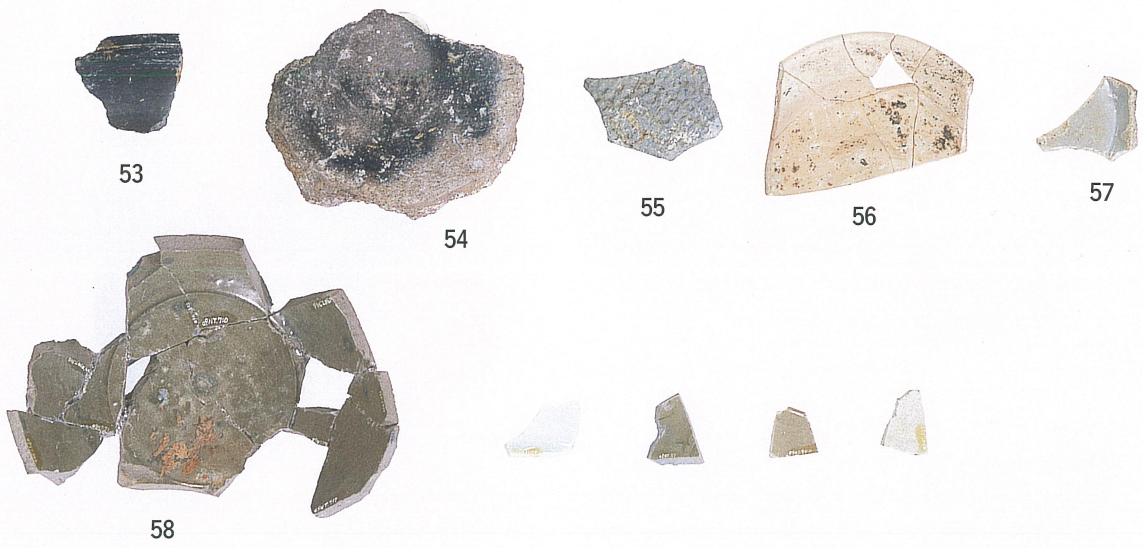
— 2 F 9 3 層ニホンシカ (1) 出土状況



土器1 (1~27, S-1/3, 番号は挿図番号に一致)



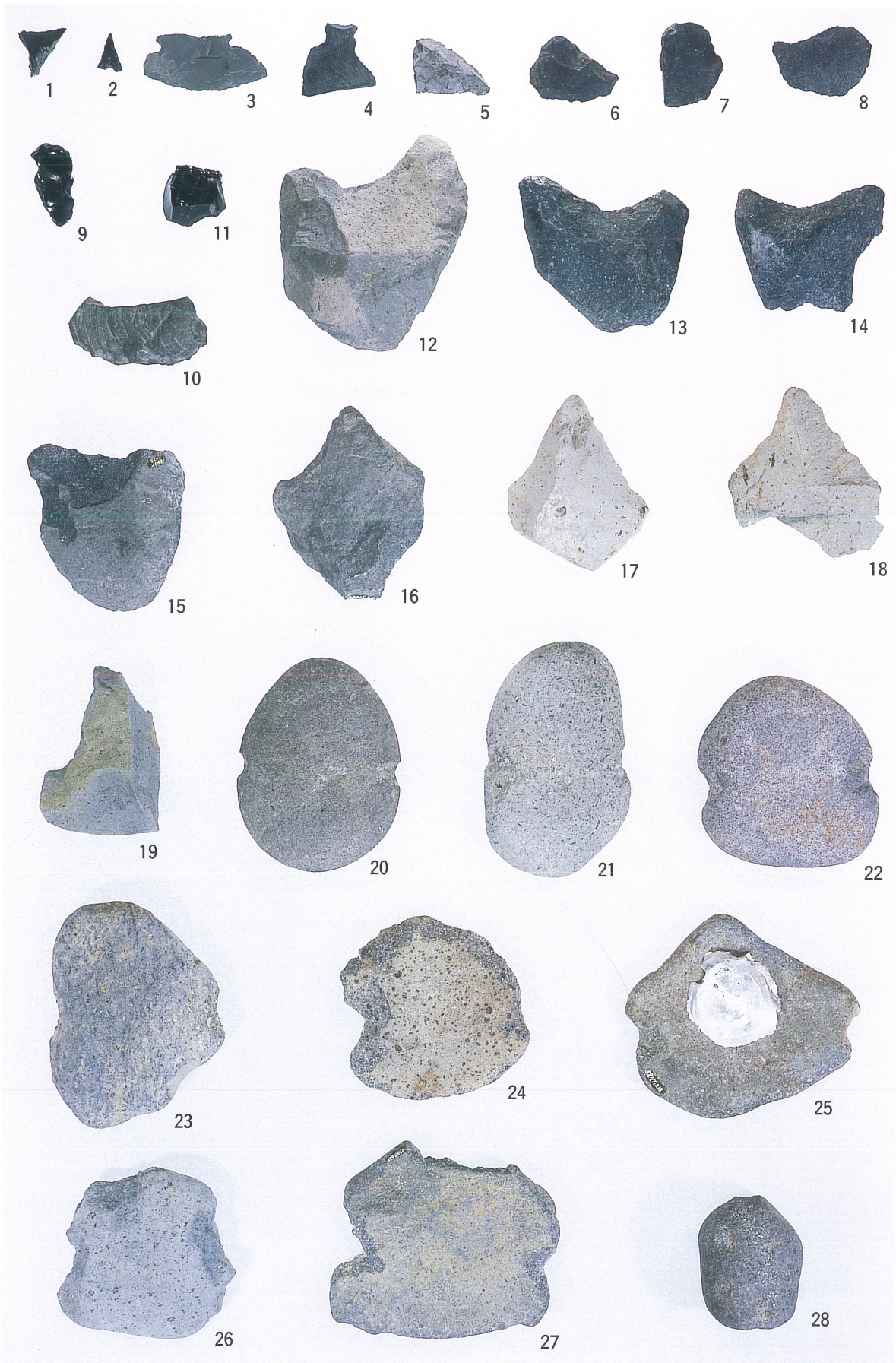
土器 2 (28~52, S-1/3)



— 1 土器 3 (53~58, S-1/3)、青磁・白磁



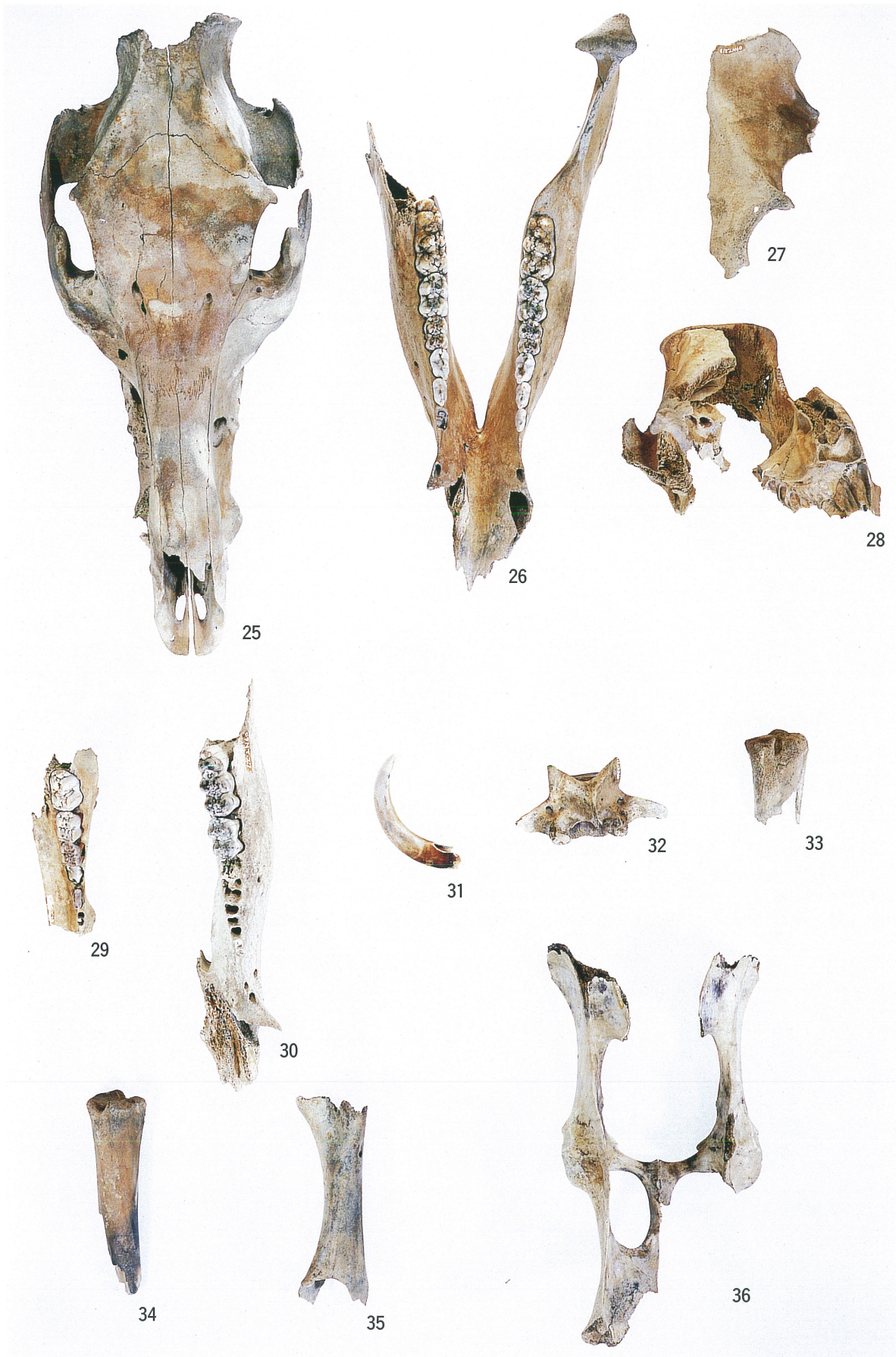
— 2 石器 (29~30, S-1/3)



石器 (1~28, S-1/3)



動物遺存体 (ニホンシカ、1~24, S-1/3)



動物遺存体 (イノシシ、25~36, S-1/3)



動物遺存体 (37~66, S-1/3)、骨角牙貝製品 (1~5, S-1/3)



遺物詳細写真（番号は挿図番号に一致）

報告書抄録

ふりがな	にしときわかいづか						
書名	西常盤貝塚Ⅱ						
副書名	市道正尾東線・綿打橋釜郷線道路改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告						
巻次							
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第25集						
編著者名	秀島貞康、野澤哲朗、田苗隆史、橋本幸男						
編集機関	諫早市教育委員会						
所在地	〒854-8601 長崎県諫早市東小路町7番1号 Tel.0957-22-1500						
発行年月日	西暦2011年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
にしときわ いせき 西常盤遺跡	いさはやし しょうきゅ うじまち 諫早市正久 寺町95-1 番地ほか	42204	84-84	30度 52分 00秒	130度 5分 30秒	試掘2009.05.13 ～2009.05.13 本調査2009.08.27 ～2009.11.13	1次24m ² 2次436.4m ²
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
道路改良事業	貝塚	縄文時代～ 歴史時代	貝塚	縄文土器 弥生土器 土師器 土師質土器 石器 動物遺存体 植物遺存体	標高0m付近に所在する遺跡で、貝層を形成する。前回調査では土偶などの検出がなされ、今回また春日式土器の検出がなされるなど、当該期の内海を中心とした地域間交流の研究において重要な遺跡である。		

諫早市文化財調査報告書 第25集

西常盤貝塚Ⅱ

市道正尾東線・綿打橋釜郷線道路改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告

2011. 3. 31

発行所 諫早市教育委員会
諫早市東小路町7番1号

印刷所 (株)昭和堂
諫早市長野町1007-2